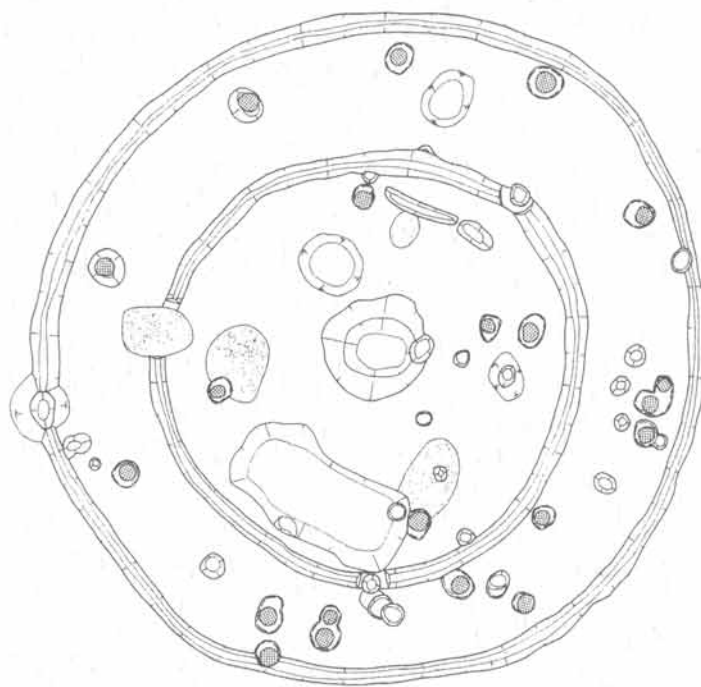


(財)和歌山県文化財センター一年報

2005年度



財団法人 和歌山県文化財センター



1. 水軒堤防の石積み 東側



2. 水軒堤防の石積み 西側



3. 荒田神社本殿の竣工



4. 和歌山城御橋廊下の竣工

目 次

表紙カット図版：竪穴住居跡 6（弥生時代後期 旧吉備中学校校庭遺跡）	
巻頭カラー図版：巻頭 1 頁 1 水軒堤防の石積（東側）	
巻頭 1 頁 2 水軒堤防の石積（西側）	
巻頭 2 頁 3 荒田神社本殿の竣工	
巻頭 2 頁 4 和歌山城御橋廊下の竣工	
平成 17 年度 （財）和歌山県文化財センター受託事業一覧	2
平成 17 年度 受託事業所在地図	3
埋蔵文化財／発掘調査・出土遺物整理	
平成 17 年度岩橋千塚古墳群の保存修理事業に伴う第 3 次調査	4
太田・黒田遺跡の（県 1 次）発掘調査	8
県指定史跡水軒堤防の発掘調査	10
旧吉備中学校校庭遺跡の発掘調査	15
野田地区遺跡の発掘調査	17
文化財建造物／保存修理・史跡整備	
重要文化財 旧中筋家住宅保存修理の設計監理	19
重要文化財 福勝寺本堂ほか 2 棟保存修理の設計監理	20
県指定文化財 荒田神社本殿保存修理の設計監理	22
重要文化財 那智山青岸渡寺本堂保存修理の設計監理	23
史跡 和歌山城御橋廊下復元工事の工事監理	24
関連研究	
太田・黒田遺跡出土の管玉 2 種	25
普及活動	
平成 17 年度事業で行った普及活動をふりかえって	27
文化財建造物保存修理に伴う普及活動	28
（財）和歌山県文化財センター平成 17 年度概要	29

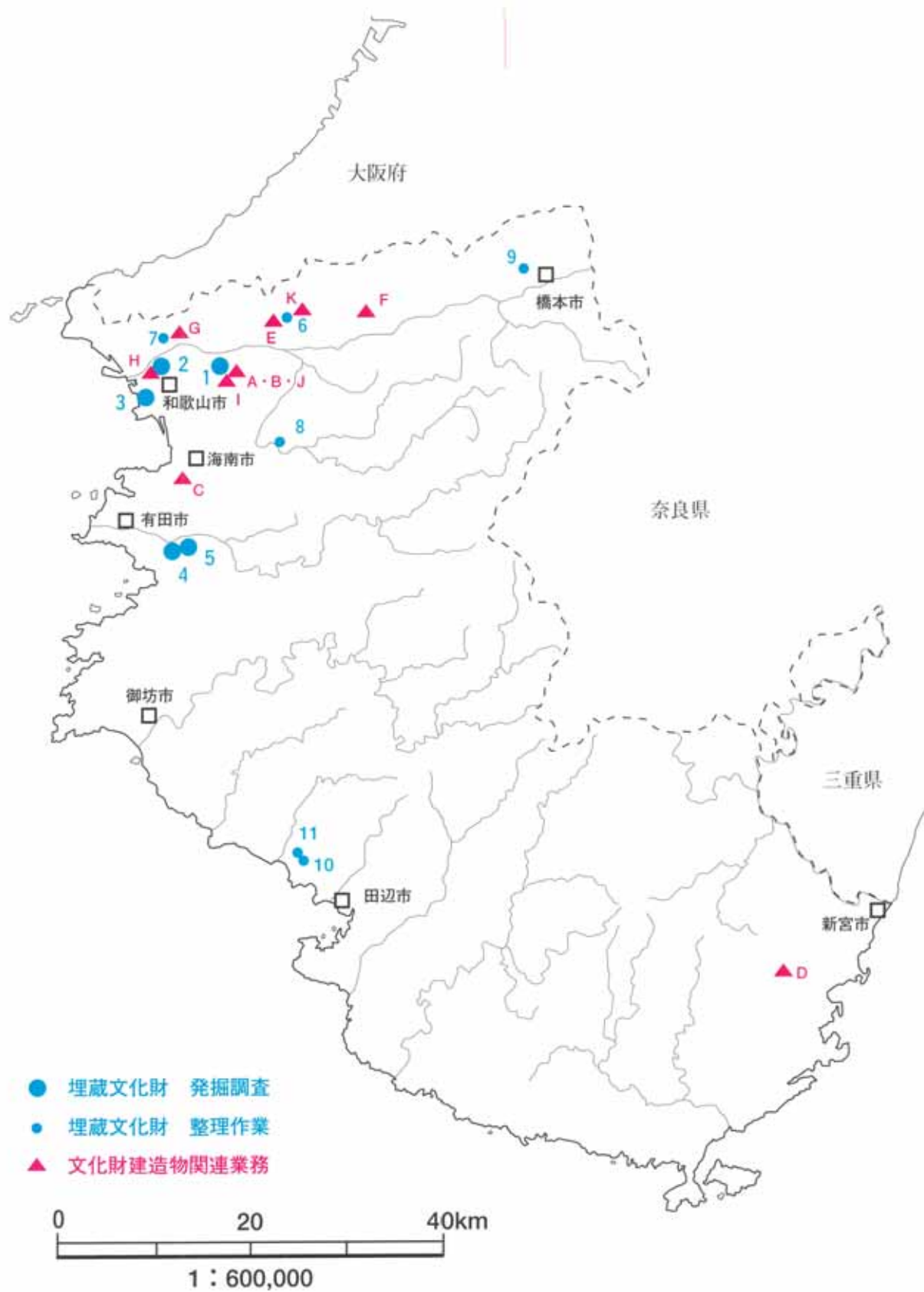
平成17年度 (財)和歌山県文化財センター受託事業一覧

埋蔵文化財発掘調査・出土遺物整理事業

	事業の名称	所在地	契約期間	面積	委託機関
1	特別史跡岩橋千塚古墳群(大日山35号墳等)保存修理事業に伴う支援業務	和歌山市	17.09.02～18.03.28	2168.1㎡	和歌山県
2	太田・黒田遺跡(県第1次)発掘調査委託業務	和歌山市	17.07.15～18.01.31	795㎡	和歌山労働局
3	和歌山下津港港湾改良発掘調査委託業務	和歌山市	17.04.13～17.07.30	163㎡	和歌山県
4	平成17年度高速自動車道近畿自動車道松原那智勝浦線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査	有田川町	17.12.16～18.03.31	682㎡	西日本高速道路株式会社関西支社
5	吉備町公共下水道事業における処理施設建設に伴う旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査業務	有田川町	17.08.23～18.02.28	2936㎡	有田川町
6	旧県会議事堂移転予定地における根来寺坊院跡確認調査事業(1)に伴う支援業務	岩出町	17.12.06～18.03.31	400㎡	和歌山県
7	西脇山口線楠見遺跡第2次遺物整理等業務	和歌山市	17.09.01～18.03.31	-	和歌山県
8	奥佐々阪井線半島振興道路整備工事に伴う野上中南遺跡出土遺物整理業務	海南市	17.04.19～17.10.30	-	和歌山県
9	一般国道24号線橋本道路出土遺物整理業務	橋本市	17.04.08～18.03.31	-	国土交通省近畿地方整備局
10	上富田南部線半島振興道路整備遺跡調査業務	みなべ町	17.04.20～18.01.31	-	和歌山県
11	古川高速道路関連河川改修調査業務	みなべ町	17.09.06～18.03.31	-	和歌山県

文化財建造物設計監理事業等

	事業の名称	所在地	契約期間	棟数	委託機関
A	重要文化財 旧中筋家住宅保存修理設計監理業務	和歌山市	17.04.01～18.03.31	6棟	和歌山市
B	重要文化財 旧中筋家住宅主屋ほか5棟の保存に係わる修理修復業務	和歌山市	17.04.01～18.03.31	6棟	和歌山市
C	重要文化財 福勝寺本堂ほか2棟保存修理設計監理業務	海南市	17.04.01～18.03.31	3棟	宗教法人 福勝寺
D	重要文化財 那智山青岸渡寺本堂保存修理設計監理業務	那智勝浦町	18.03.01～18.03.31	1棟	宗教法人 那智山青岸渡寺
E	県指定文化財 荒田神社本殿保存修理設計監理業務	岩出町	17.04.01～18.03.31	1棟	宗教法人 荒田神社
F	県指定文化財 十禅律院本堂ほか保存修理設計監理業務	紀の川市	17.04.01～18.03.31	1棟	宗教法人 十禅院
G	県指定文化財 総持寺本堂保存修理に伴う指導業務	和歌山市	17.04.01～18.03.31	1棟	宗教法人 総持寺
H	史跡 和歌山城御橋廊下復元工事監理業務	和歌山市	17.06.02～18.03.31	1棟	和歌山市
I	紀伊風土記の丘重要文化財民家等修繕設計監理業務	和歌山市	17.10.20～18.02.28	3棟	和歌山県
J	旧中筋家住宅保存修理に伴う未指定建造物等調査業務	和歌山市	18.01.10～18.01.20	1棟	和歌山市
K	旧県会議事堂保存整備における基本設計業務	岩出町	17.08.01～17.12.28	1棟	和歌山県



平成17年度 受託事業所在地図

特別史跡岩橋千塚古墳群の保存修理事業に伴う第3次調査

特別史跡^{いわせ}岩橋千塚古墳群は和歌山市東部の岩橋山塊に群集する約430基の古墳を対象とした特別史跡であり、紀氏を中心とする集団の墓域と考えられている。

和歌山県文化財センターでは、平成15年度から特別史跡岩橋千塚古墳群の保存修理事業に伴う支援業務の委託を受け調査を行ってきた。本年度は大日山35号墳と前山A67号墳の発掘調査のほか、知事塚古墳を含む前山A・B地区の古墳9基の墳丘測量及び横穴式石室の簡易実測の支援を行っている。ここでは、当センターが発掘調査の委託を受けた大日山35号墳と前山A67号墳の調査成果について、概要と現状認識を示しておくことにする。

(1) 大日山35号墳の発掘調査

本年度は大日山35号墳の第3次調査にあたり、西造出（第5トレンチ）、後円部（第15トレンチ）、前方部（第16トレンチ）、墳頂部（第17・18トレンチ）の調査を実施している。調査面積は計298.9㎡であり、現地調査は9月8日に開始し、3月10日に終了した。

第5トレンチ（西造出ほか） 第5トレンチは西造出の調査のほか、中間段テラスの形象埴輪・須恵器樹立の有無、最下段テラス円筒埴輪列の検出を目的として設定した調査区である。

西造出は緑色片岩の岩盤と地山をベースとし、部分的に盛土を行って造成されている。上面には南北約7～9m、東西約6～8mの平坦面があり、四方を円筒埴輪がめぐる。墳丘中間段に沿った造出東辺の円筒埴輪列はやや弧を描いて並んでいるが、北辺では2箇所、南辺では4箇所屈折して並んでおり、西辺についても2箇所程度で屈折した円筒埴輪列となっているものと推定される。造出の北斜面は北西へ明確な谷となって落ちているが、南斜面は岩盤を少しだけ削り出して造成されており、緩やかな斜面となっている。造出上面の円筒埴輪列に対応して、斜面下の円筒埴輪片がたまっている地点も屈折している状況が観察できることから、造出の南辺は上端と下端が対応した形をしているものと考えられる。造出の西辺は急角度の斜面であり、造出から転落した埴輪片が散乱している標高132m付近が造出の下端と認識される。



写真1 西造出全景（東から）



写真2 形象埴輪台円筒の位置（南から）

西造出の円筒埴輪は、東列29本（調査区全体では38本）、北列14本、南列17本、西列7本を確認した。円筒埴輪列は普通円筒埴輪の他に朝顔形埴輪が混じっており、東列（中間段円筒埴輪列）では11本に1本、北・南・西列では基本的に8本に1本の割合で確認できる。また、蓋形埴輪も円筒埴輪に沿って出土する傾向が見受けられ、その分布状況から2本の朝顔形埴輪のほぼ中間にある円筒埴輪の上部に蓋形埴輪を載せていた可能性が比較的高いものと考えられる。

西造出南半には形象埴輪群が配置されている。人物埴輪が6体以上（武人1、女性1、黥面の人物2、人物体部1、腕12点以上）、馬形埴輪が2頭、胡籥・鞞（矢を入れる道具）と家形の埴輪が各1個体出土している。原位置をとどめるものとして、馬2頭と家、胡籥、武人の台のほか、形象埴輪の基部が5箇所、形象埴輪の据付穴と判断されるものが1箇所を確認できた。

武人埴輪の頭部は高さが約22cmあり、衝角付胃の表現の影響の残る眉庇付胃を装着している。この頭部と組み合うものと考えられる特殊な台円筒が約2m西で出土しており、草摺がかぶさっている。東隣りにはスカート状の形象埴輪の基部が出土しており、武人埴輪と向き合っている可能性が考えられる。胡籥形埴輪は形象部の長さが約60cmあり、ほぼ完存する貴重な例である。

造出北半には須恵器の大甕と壺が据えられている。その東側には原位置をとどめる埴輪や土器が認められない空白地があり、飲食物供献儀礼のための空間としてあけられていたものと推定される。また、造出上にはピットや微妙な窪みがあり、須恵器の高坏・坏・壺甕類や土器の高坏等の破片が出土した。ピットは馬の周辺や胡籥の北側、造出西側の形象埴輪が存在したと思われる地点のすぐ東側など、形象埴輪に接した空白地側に分布する傾向がみられる。

北西・南西拡張区では最下段テラスと円筒埴輪列を確認した。北西拡張区では円筒埴輪2本と据付穴1箇所、南西拡張区では円筒埴輪3本と据付穴1箇所を検出した。据付穴は径約30～45cm、残存する深さが約15cmで、据付穴同士の心々距離は60～70cmであった。

第15トレンチ（後円部） 後円部の北西に長さ18.5m、幅2m、面積37㎡の調査区を設定し、中間段・最下段の調査を行った。中間段では原位置を保つ円筒埴輪を6本、最下段では2本確認したほか、最下段の裾では岩盤と地山を削り込んだ傾斜変換の掘り込みを確認した。



写真3 武人と女性埴輪基部か（北から）

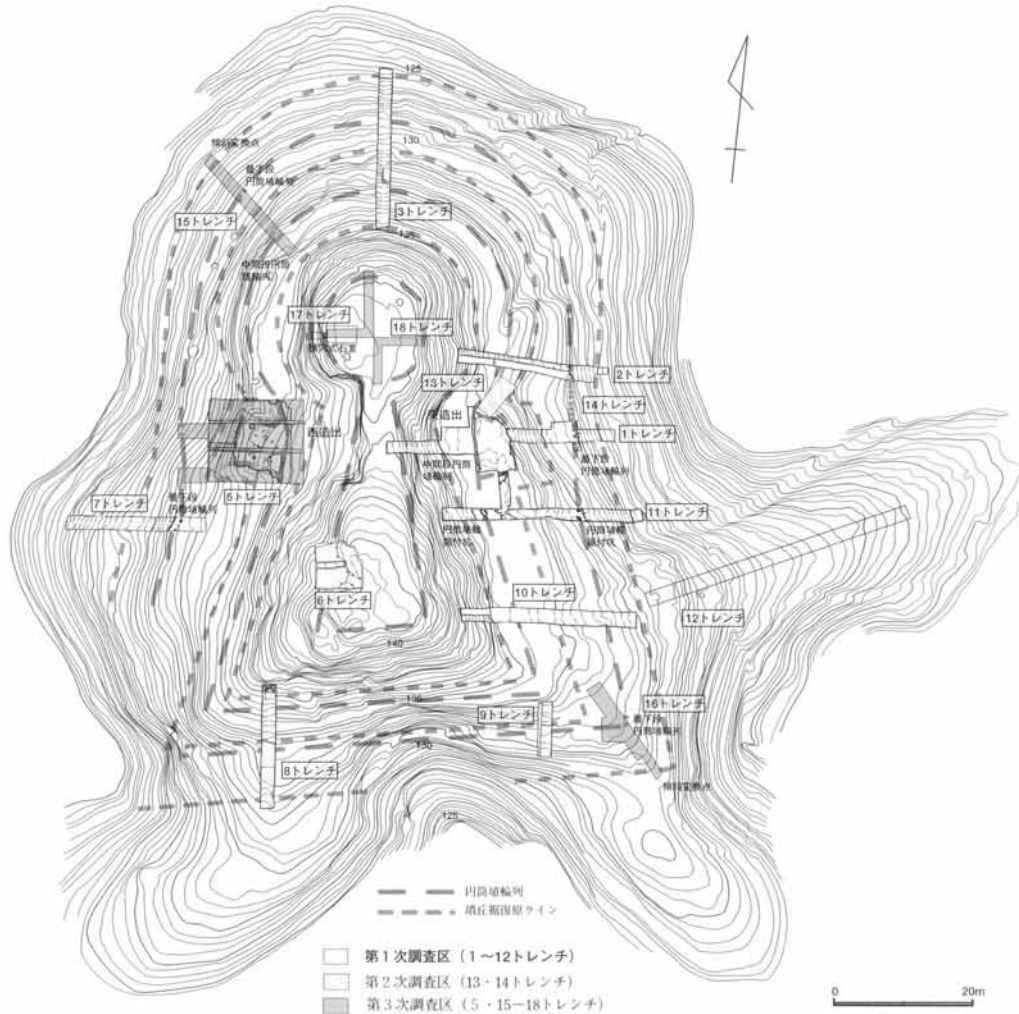


写真4 武人頭部（北西から）

第16トレンチ（前方部） 前方部南東隅に長さ16m、幅2mで、西と南へ拡張区をもつ調査区を設定し発掘を行った。調査区の中央で最下段テラスの円筒埴輪を2本、南端で最下段の斜面裾部を示す溝状の掘り込み遺構を確認した。溝状遺構は民有地との境に存在するため、1m分しか確認できていない。この溝状遺構を墳丘主軸に直交するものとして均整のとれた形状で大日山35号墳を復元すると、墳長83m、総長102mの古墳と考えることができる。しかし、溝状遺構の方位は厳密には墳丘主軸に直交する方位より若干南西に振れており、現状の前方部前端的地形とほぼ一致する。地形の制約等の理由で前方部が南西方向へ張り出していると考え、大日山35号墳は主軸上で墳長約86m、基壇と推定される盾形の最下段の総長が約105mの前方後円墳となる公算が高い。

第17トレンチ（墳頂部） 後円部仮中心点から幅1.5m、西へ6.5m、北へ10mの範囲で設定した調査区である。墳頂から須恵器片が少量、縁辺部から円筒埴輪片が集中して出土した。

第18トレンチ（墳頂部） 後円部仮原点（0.0点）から幅1.5mで、東へ6m、南へ7mの範囲を設定した調査区である。円筒埴輪片が南側で少量出土した。



大日山35号墳 調査区の配置と墳丘復原案

(2) 前山A 67号墳の発掘調査

前山A 67号墳は南東方向に横穴式石室が開口する径約27mの円墳である。石柵^{いしだな}1枚と垂直方向の石梁^{いしはり}2枚を架構した玄室があり、6世紀後半頃の古墳と推定されている。本年度は石室への入口部分を発掘し、羨道^{せんどう}と墓道^{ぼどう}を確認した。調査期間は10月17日～11月15日で、3月6日～9日に追加調査を行っている。調査区は長さ7.65m、幅平均2.12m、面積約16.2㎡で、須恵器・土師器細片、焼土塊などが微量出土している。

羨門^{せんもん}は両側壁に縦方向の石が組み込まれた奥の地点（A地点）と、床面に高さ約10cm、厚さ約5cm、長さ40cmと60cmの板石片が置かれた手前の地点（B地点）の2箇所の候補がある。側壁と天井石の残存状況、また上層から出土した閉塞石と考えられる石の大きさから、A地点は閉塞施設として機能するものと考えられる。B地点については閉塞施設として機能し得るのか、またその他の目的があるのか判然としない。

側壁は玄室側からA地点までは完存し天井石が載っているが、B地点より手前は1～4石分だけ積まれた状態で検出された。側壁の基底石はB地点まで地山に据付穴を掘って据えられているが、B地点より手前は地山の上に確認できる分で6層分の粘質土・砂質土・礫層を積み上げ、その上に石を置いて側壁の延長としている。これはB地点で地山が南側の谷へと急角度で落ちる場所であるためであり、礫層を含む6つの層は墳丘や羨道・墓道を確保するための基礎地形と考えられる。B地点より手前の側壁は長足積みを多用し、手前に傾いているものが多く、石組は左側壁（玄室からみて）の接合部を除いて1～2石しか積まれていない。

羨道より手前の石組の途切れた部分を墓道として調査している。墓道は手前では若干開きぎみの平面形をしており、墳丘外へ差し掛かる地点に炭化物の混じる土坑が検出された。焼土塊の小片も出土しており、墓前で火を用いた祭祀行為が行われた可能性も考えられる。

前山A 67号墳の周辺には南東方向に石室が開口している古墳が多く、尾根の南斜面を登る同一の墓道に繋がっているものと考えられる。前山A 67号墳はこの墓道に連なる小支群の中心的な古墳であり、周辺の古墳について検討する上でも重要な調査であったといえるだろう。（丹野 拓）



写真5 前山A67号墳全景（南東から）



写真6 前山A67号墳羨道（南東から）

太田・黒田遺跡の（県1次）発掘調査

調査区と基本層序 調査区は西側をA区、東側をB区に分けて（それぞれ南北約21.5×東西約18.5m）、約795㎡を調査した。基本的な土層堆積は0～10層（0層：現代盛土、1-1・1-2層：現代耕作土、2層：江戸時代以降の耕作土、3-1～3-3層：奈良時代の遺物包含層・洪水堆積層、4層：弥生時代中期の遺物包含層、8層：弥生時代前期の遺物包含層、9層：黄褐色シルト層＝地山）に分けられる。この他、5・6層（弥生時代前期～中期の谷状地形の埋土）、7層（6層以下の河川堆積）、10層（6層以下の湿地状堆積＝地山か）を確認している。

発掘調査の成果 【2層上面遺構】2層上面で江戸時代以降の南北方向に並行する鋤溝群（耕作関係の小溝群）を検出。耕作地を造成する際や耕作する際に鋤によって施された痕跡であろう。

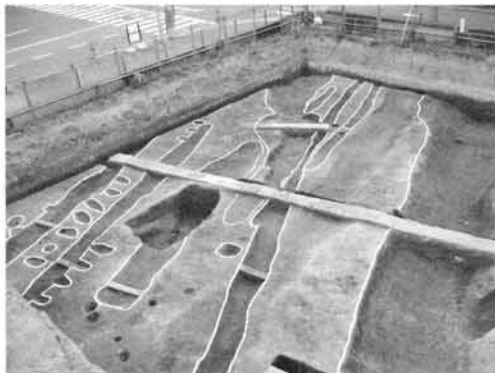
【3層上面遺構（2層下面遺構）】3層上面では江戸時代の鋤溝群を検出した。南北方向に並行して、一部は東西方向に直交する。2層と同じ土で埋まっており、江戸時代の遺構と考えられる。

【3-2層上面遺構】3-2層上面で北東から南西方向に流れる流路や溝を検出した。流路（遺構90）は埋土が砂～礫層で、最終的に洪水によって埋没した可能性がある。須恵器のはそう3点以上の他、奈良時代の須恵器や土師器が多く出土する。流路に並行する複数の溝（遺構100・102等）には、底面に鋤で掘り返したような痕跡が残るものがあり人為的な溝と判断した。これらに並行して等間隔に連続して並ぶ土坑群が数列検出でき、道路遺構の可能性が推定される波板状土坑等と呼称される遺構に類似している。他に方形土坑や大形土坑等を検出した。

【4層上面遺構】4層上面で弥生時代中期（中期中葉～後葉）の遺構を検出した。

竪穴住居（遺構300）は直径7m以上の円形住居で、北半分だけ検出した。3条の壁溝は内側から外側へ新しくなる。埋土に炭化物や焼土を含み、焼失して廃棄された住居と考えられる。住居内で完形の壺や甕等が出土し、居住している間に火災にあった可能性がある。住居を弧状に取り囲む溝（遺構290）がある。竪穴住居との切り合いは確認できず、同時期に存在した可能性が高い。

谷状地形の埋土上で検出した井戸（遺構140・142・150）は、砂層（7層）を掘り込み湧水を得ている。遺構140は2つの円形井戸が重なり、北側の井戸が埋没後に南側が作られる。南側には径約0.7mの木製井戸枠が用いられていた。木枠内からは完形の弥生土器が数個体出土している。



A区 3-2層上面 流路・溝〈奈良時代〉



A区 4層上面 全景〈弥生時代〉

幅2m前後の溝を複数検出した(遺構129・291・130)。下層に若干流水痕跡が残る。遺構128(溝)は弧状を描く溝で、一部とぎれているが規模・埋土などの類似性から一連の溝と判断した。周溝墓や住居を囲む溝等の可能性もあるが、その機能を判断できる痕跡は確認できなかった。

遺構125・126(土器棺)は2つ並んだ土坑にそれぞれ弥生土器の壺と甕を埋置する。前者は土坑内に壺を置き、逆さにした高杯を蓋として被せている。後者は土坑内に甕を置いたもので、蓋は確認できなかった。この他、平面が長楕円形状の遺構を複数検出し、これらは長軸方向の両端からなだらかに中央部分へ向けて深くなる。土壙墓等の可能性もあり、今後検討を要する。

【谷状地形】A区のほぼ全域を南北に走る谷状の地形で、埋土等の状況から人工的に作られた溝ではなく、谷状の地形と判断した。埋土下層から弥生時代中期前葉～中葉の土器等が出土する。

【8層上面遺構】谷状地形埋土より下層に弥生時代前期末の遺物を含む地山(9層)と類似した黄褐色シルト層(8層)がある。A区南西隅の8層上面で弥生時代前期末の遺構を数基検出した。

まとめ 弥生時代(前期～中期)・奈良時代・江戸時代と3時期の遺構面を調査した。弥生時代前期末の遺構が最も古く、おそらく調査地より南西側に当該期の集落域があったと推定できる。弥生時代中期前葉の遺構は確認できないが、谷状地形埋土から中期前葉～中葉の土器が出土した。谷状地形埋没後、弥生時代中期中葉～後葉に住居や井戸等の遺構が多く形成される(4層上面遺構)。竪穴住居は焼失住居で、完形の土器が出土している。この住居は溝(遺構290)によって囲まれていた可能性がある。他に住居は確認できず、同時期の集落域は南側に広がると推測する。奈良時代になると北東から南西方向へ流路が流れ、それと並行する溝や連続する土坑群が形成される。羽柴秀吉の水攻めで有名な太田城関連等の中世の遺構・遺物は確認できなかった。江戸時代以降は鋤溝群を検出し、当該地は耕作地として利用されている。今回の調査ではほとんど調査例のなかった東側縁辺部の様相を明らかにすることができた。特に弥生時代では集落域が従来想定されていたより東側へ広がることを確認し、集落構造を理解するための一視点を示す成果となった。

なお、出土遺物は、奈良時代の須恵器や土師器、弥生時代の土器(前期末～中期後葉)や石器(石鏃・石錐・石剣・石庖丁・大形石庖丁・柱状片刃石斧・鑿^{のみ}状石斧・環状石斧・管玉等)、木製容器等が出土した。縄文時代の遺物はなく、古墳時代、鎌倉・室町時代の遺物もほとんど出土しない。遺物量は収納コンテナ約220箱になる。(仲原 知之)



A区 4層上面 土器棺(遺構126・125)



B区 4層上面 竪穴住居300

県指定史跡水軒堤防^{すいけん}の発掘調査

調査の経緯と経過 和歌山下津港本港一号線交差点部分の道路拡幅工事が計画され、施工範囲に含まれる県指定史跡水軒堤防（昭和34年県史跡）について現状変更許可申請書が提出された。県教育委員会は工事施工時に立会調査が必要という条件を付けて許可し、平成17年2月に県教育庁文化遺産課による立会調査が実施され、残存状況が良好な石積みの旧堤防の一部が検出された。そのため本格的な発掘調査を実施して精細な記録を残す必要性が生じたため、和歌山下津港湾事務所・文化遺産課による協議のうえ、当センターが発掘調査（調査面積約163㎡）を実施することとなった。石積みの平面図・立面図・断面図については写真測量を委託して作成した。なお、調査終了後に安全を考慮して上面を残して一部埋め戻しをおこなった。

地理的・歴史的環境 水軒堤防は、和歌山市西浜に現存する防潮・防波堤防で、南北に流れる水軒川と和歌山南港（水軒浜）との間に所在し、南端は養翠園まで続く。過去の報告（田中1950）によると、初代紀州藩主徳川頼宣期の寛永年間（1624～1644年）に朝比奈段右衛門（隠居名水軒）が約13年かけて築造し、規模は高さ3～6間（5.4～10.8m）・全長900余間（1.62km）で、表築石は和歌山城改修の和泉砂岩、裏築石は雑賀崎石を使用していると記載されている。水軒堤防の西側一帯は昭和30年代以降埋め立てられるが、当初は海に面した砂州上に築造されていた。安政年間（19世紀中頃）の絵図『異船記』には石積みが描かれており、その後昭和の初め頃まで一部石積みが露出していた。現在石積みは砂で覆われて確認できない。

調査の成果 石積み堤防は、石積み上面から深さ約3m地点まで検出した。石積み上面は標高約3.7m、検出できている下端は標高約0.75mで、安全な勾配を保つためこれ以上掘削できなかったが、石積みはさらに下に続く。石積み堤防の構造は、西側（海側）が緩やかな勾配（40°）で砂岩（和泉砂岩）の加工した切石を積んでいるのに対して、東側（陸側）は急な勾配で（53°）、結晶片岩（緑泥片岩・青石）と粗加工した砂岩（和泉砂岩）を交互に積んでいる。これらの石材は水軒堤防一帯では獲得できず、結晶片岩は雑賀崎を含めた紀ノ川南岸一帯に産出し、和泉砂岩は和泉山脈から加太・友ヶ島にかけて産出し、これらの地域から搬入された可能性が高い。

【石積み西側】側面をきれいに加工した切石によって隙間がないくらいに精緻に積み重ねられており（切り込みはぎ）、「布積み」と呼ばれる水平に目地（石のつぎめ）が通る積み方をしている。上から9段目までは横長の石材を用いているが、それより下方はやや大きめの正方形に近い石材が使われている。石材は表面を平らに加工せずに、丸く膨らむように周辺部を加工している。この技法は17世紀代の金沢城などの石垣に見られる「こぶ出し」と呼ばれる技法に通じる要素があるが、金沢城などでは視覚効果を狙った技法であるのに対し、今回検出したものは堤防に使用されており、違った要素があったと考えられる。西側の石積みが緩やかな勾配で構築されているこ

とも含めて、土木工学的な視点で構築方法を考察する必要がある。西側石積みには石材を切り出す際に施される「矢穴」の残存する石材が7つ確認できた（矢穴⑦～⑬）。矢穴の法量は縦6.0～7.0cm、横0.4～3.0cm、深さ4.0～6.0cmをはかる。

【石積み東側】最上段に砂岩を1列、中央部横方向に砂岩を2列積んで、中央部砂岩列より上方と下方に結晶片岩を積んで構築される。これらの砂岩は、西側と違って粗い加工を施した石材を使用している（打ち込みはぎ）。上下の結晶片岩は同じような積み方をしているが若干の違いがある。砂岩列より下方の結晶片岩は、石材は大きくないが丁寧に積んでいて、斜め勾配がきれいに揃う。砂岩より上方の結晶片岩はやや雑に積んで、斜め勾配が不揃いな部分が多い。また下方には結晶片岩のみが積まれているのに対し、上方には結晶片岩の他に少量の砂岩が含まれる。中央部の砂岩を粗加工した際に生じた破片を結晶片岩に混ぜて積んだと考えられ、上方の結晶片岩は中央部の砂岩と同時期に構築されたと推測できる。東側の中央砂岩列下端と西側の上から9段目下端のレベルがほぼ同じで、この高さで石積み作業上の1つの単位があったことがわかる。

【石積み上面】上面の東西幅は約3.8mで、石材は砂岩の切石が用いられている。西側・東側に比べてやや大ぶりの砂岩が使われ、重量のある石材を上面に使うことで石積み全体の安定を図った可能性がある。西側に比べて石材間には隙間があり、そこに結晶片岩の小片を間詰めしている箇所が多く見られる。5箇所矢穴が確認できる（矢穴①～⑤）。矢穴④・⑤は矢穴が1個、矢穴①は矢穴が2個、矢穴②・③は矢穴が3個残存する。矢穴の法量は縦5.0～6.2cm、横0.4～3.8cm、深さ4.2～7.0cmをはかる。また、矢穴①の北隣の石材には側面に矢穴が2個残存しているのを確認した（矢穴⑥）。法量は縦5.0・5.4cm、横2.2・3.0cm、深さ8.0cm前後をはかる。

【土層堆積状況】現在石積み上には砂が約1m堆積している。石積み上面を覆う堆積砂（2-2層）から昭和20年代の5円玉・10円玉が出土し、その当時まで石積み上面が露出していたことがわかる。石積みの西側は、自然に堆積した砂の層（2-1、2-2、4、6、7-2層＝砂層）と貝殻や炭などを多く含む層（3、5、7-1層＝炭層）が交互に堆積する。砂層は均質でほとんど貝殻やゴミなどを含まず、短期間に堆積したと推察できる。炭層は砂の堆積後に、石積みに貼り付くように薄く堆積している。風や波で運ばれた貝殻などが堆積したと推測する。0-1層は現代の攪乱層で、堤防西側を走っていた線路敷設時の堆積であろう。7-1層からは近現代の磁器片が出土し、この層より上層は近現代以降の堆積といえる。7-2層からは遺物は出土していない。

石積みの東側は、石積み上面より下のレベルでは西側とは違って自然堆積ではなく、人工的な盛土が確認できる。主に黄褐色粘土層（8-1、8-2、8-4、10、11-1、11-2、13層）とオリーブ褐色砂層（8-3、9-1、9-2、12、14層）で盛土が形成される。粘土層は石積みに貼り付く部分では厚く積んで、石積みを保護する目的があったと考えられる。この一帯は

砂州状の地形で粘土質の堆積はなく、この粘土層は他所より運びこまれたことになる。なお、黄褐色粘土には結晶片岩の細片が含まれる。石積みに粘土層が貼り付くことから、東側の石積みは盛土内に隠れていたことになる。つまり、海側は石積みが露出し、東側の背後は盛土によって構成された堤防であったと判断できる。文献には石積み背後に風潮防備林（松）を植えていたとされ、石積み東側の盛土上に風潮防備林があった可能性がある。ただし盛土からは時期を示す遺物は出土していない。

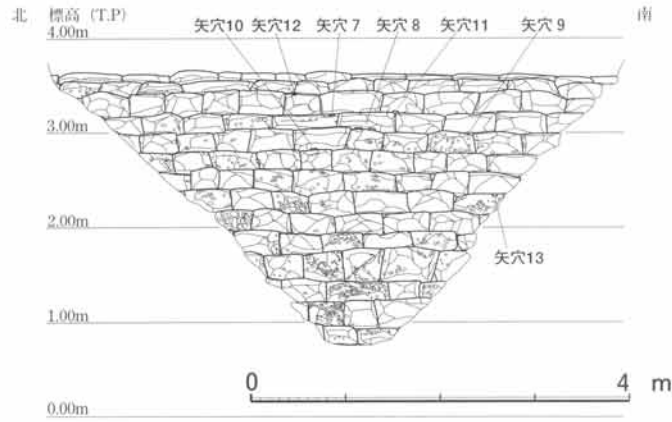
まとめ 今回検出した石積み堤防は、年代を示す遺物が出土しなかったため詳細な年代を比定することは難しいが、精巧に加工した切石を用いて布積みで構築されるなど、江戸時代（17世紀～18世紀）に築造されたものと考えられる。このような石積みは同時代には城などでは確認できるものの、堤防としては全国的にみても貴重な発見となる。この堤防の築造によって、東側一帯の耕地化が可能になるとともに、現在に至るまで津波や高潮などに対する防災の役割を十分に果たしていたことが伺える。水軒堤防築造以降、宝永地震（1707年）・安政南海地震（1854年）・昭和南海大地震（1946年）といった大地震によって破損することなく現在までその姿を保っていることは、土木技術の高さを示すものと考えられる。水軒堤防は、地域の貴重な歴史的文化財であるとともに、和歌山県の防災の歴史を考えるうえで、19世紀に浜口梧陵が完成させた広川町に所在する国指定史跡広村堤防と並んで重要な土木遺産といえる。（仲原 知之）

【普及事業について】各分野の先生方に専門的な意見を聞くために現場にお越し頂いた。また、当センターの活動として、広く文化財を普及していくために現地説明会やシンポジウムなどを開催した。簡単に列挙しておく。

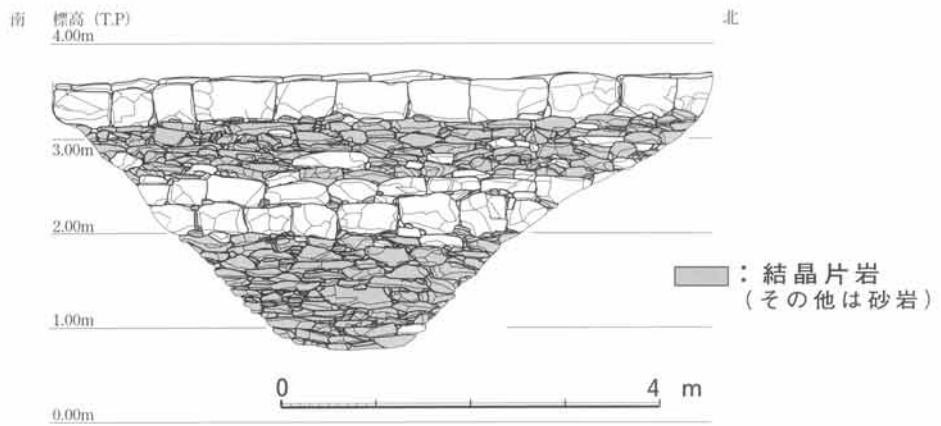
来訪者・助言者：（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター森島康雄氏、和歌山大学教育学部教授陣（藤本清二郎教授－教育学部長・近世史、此松昌彦助教授－古環境学、海津一朗教授－日本史、久富邦彦教授－堆積学、宇民正教授－システム工学部）、和歌山市立博物館額田雅裕学芸員、元東大阪短期大学教授北垣聡一郎氏－城郭史、作家神坂次郎氏、日本考古学協会員小賀直樹氏、和歌山大学教育学部米田頼司助教授－社会学
普及活動：現地説明会（5/28、約150名）、和歌山工業高校土木科1～3年生見学（5/25・26・30、各約40名）、水軒堤防の件でNHKニュース「紀伊パーソン」仲原出演（6/13）、『シンポジウム県指定史跡水軒堤防を考える』開催（7/9、約70名、北垣「水軒堤防の石積み技術について」、藤本「江戸期、西浜村の開発と水軒堤防」、此松「江戸時代以降の南海地震による被害と水軒堤防の役割」、仲原「水軒堤防の発掘調査について」）

【引用・参考文献】田中敬忠1950「水軒防波堤」『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』第22集、田中敬忠1982「水軒防波堤を築いた朝比奈段右衛門」『木の国』15（木国文化財協会）、（財）和歌山県文化財センター2005『シンポジウム 県指定史跡水軒堤防を考える』資料、藤本清二郎2005「江戸期、城下近郊海浜部の防災堤防－紀州西浜村水軒堤防の築造期を中心に－」『和歌山大学紀州経済史・文化史研究所紀要』第26号、仲原知之2005「県指定史跡 水軒堤防 特集！」『風車（文化財センター通信）』第13号、仲原知之2005「特集！ シンポジウム『県指定史跡水軒堤防を考える』」『風車』第14号、仲原知之2005「和歌山県指定史跡「水軒堤防」の石積み構築技術と石材」『関西近世考古学研究』XⅢ（関西近世考古学研究会）

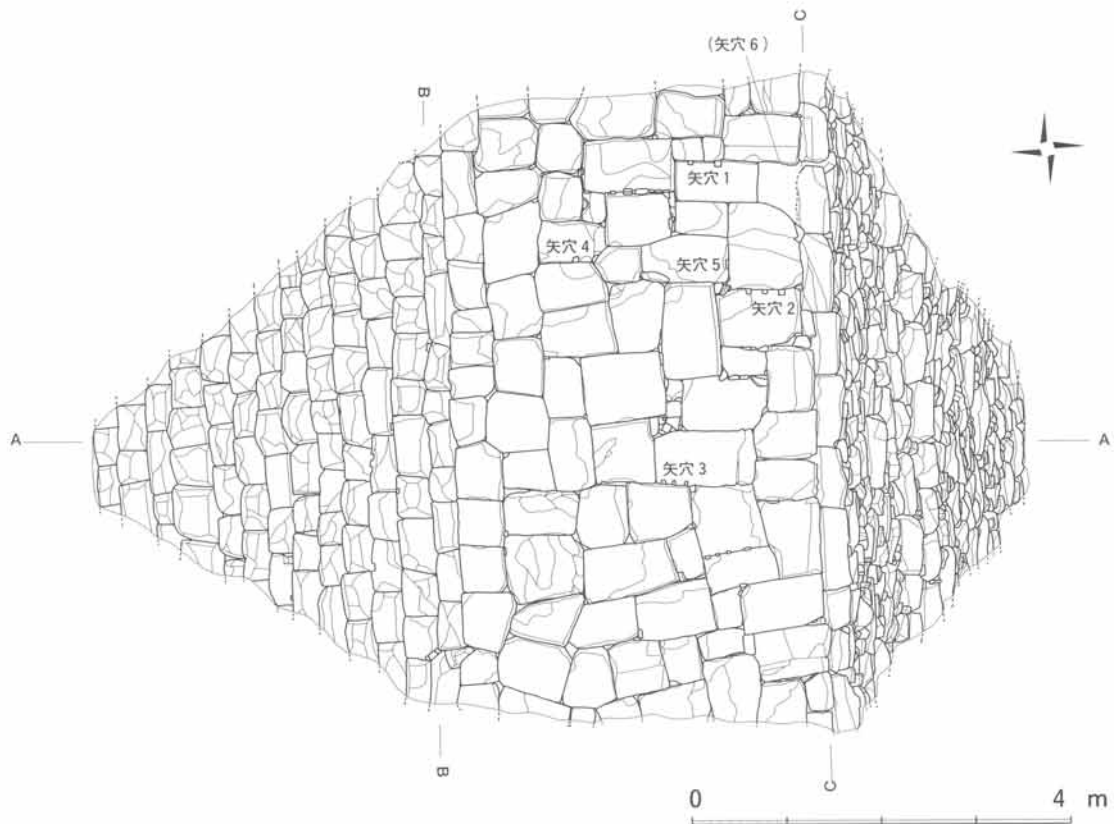
石積み西側



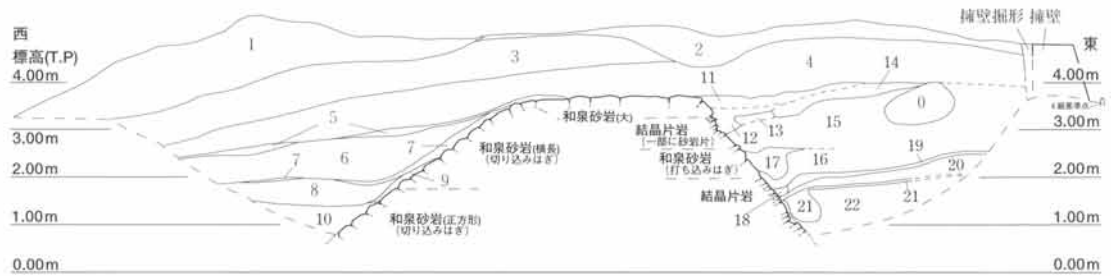
石積み東側



水軒堤防石積み堤防立面図 (S = 1 / 80)



水軒堤防石積み堤防平面図 (S = 1 / 80)



<石積み西側土層堆積>

- 1 : 0-1層 (2.5Y7/4浅黄色粗砂+礫多い=現代攪乱 (→ゴミ多く含む))
- 2 : 1層 (10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 (小礫多い) =表土・根攪乱)
- 3 : 2-1層 (2.5Y5/2暗灰黄色細砂 (やや砂粒大きく2-2層より締まる) =自然堆積か)
- 4 : 2-2層 (2.5Y5/2暗灰黄色細砂 (砂粒小さく2-1層より締まっていない) =自然堆積か)
- 5 : 3層 (2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂~細礫 (やや湿り気あり) →ゴミ・貝殻含む)
- 6 : 4層 (2.5Y4/2暗灰黄色細砂 (崩れやすい) =自然堆積)
- 7 : 5層 (2.5Y3/2黒褐色細砂 →細礫・炭・貝殻多く含む)
- 8 : 6層 (2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 (4層に比べ崩れやすい、7-2層より湿り気あり) =自然堆積)
- 9 : 7-1層 (2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂 →磁器含む (近現代か)、炭・貝殻含む)
- 10 : 7-2層 (2.5Y4/2暗灰黄色細砂 (崩れにくい) =自然堆積)

<石積み東側土層堆積>

- 0 : 0-2層 (2.5Y4/2暗灰黄色細砂 (7.5YR6/6橙色粘土若干含む) =攪乱 →棧瓦多く含む
(本来は上層から切り込んでいた可能性大))
- 2 : 1層 (10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 (小礫多い) =表土・根攪乱)
- 4 : 2-2層 (2.5Y5/2暗灰黄色細砂 (砂粒小さく2-1層より締まっていない) =自然堆積か)
- 11 : 8-1層 (2.5Y6/6明黄褐色粘土 (非常に締まる、結晶片岩細礫含む) =盛土 →石材に貼り付く)
- 12 : 8-2層 (7.5Y6/6橙色粘土 (非常に締まる、結晶片岩細礫含む) =盛土 →石材に貼り付く)
- 13 : 8-3層 (2.5Y4/2暗灰黄色細砂=盛土か →砂)
- 14 : 8-4層 (7.5YR6/6橙色粘土+2.5Y4/2暗灰黄色細砂 (結晶片岩細礫含む) =盛土)
- 15 : 9-1層 (2.5Y4/4オリーブ褐色細砂 →9-2層と同じ土質で区別困難=盛土か)
- 16 : 9-2層 (2.5Y4/4オリーブ褐色細砂 →9-1層と同じ土質で区別困難=盛土か)
- 17 : 10層 (10YR6/6明黄褐色粘土 (非常に締まる) =盛土 →石材に貼り付く)
- 18 : 11-1層 (10YR5/6黄褐色粘土 (非常に締まる) =盛土 →石材に貼り付く)
- 19 : 11-2層 (10YR5/6黄褐色粘土 (小礫混じり) +2.5Y4/4オリーブ褐色細砂 (結晶片岩小礫含む) =盛土)
- 20 : 12層 (2.5Y4/4オリーブ褐色細砂=盛土か →14層と同じ土質)
- 21 : 13層 (10YR5/8黄褐色粘土+2.5Y4/4オリーブ褐色細砂 (結晶片岩小礫含む) =盛土)
- 22 : 14層 (2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 (均一の堆積) =盛土か)

水軒堤防石積みおよび土層断面図

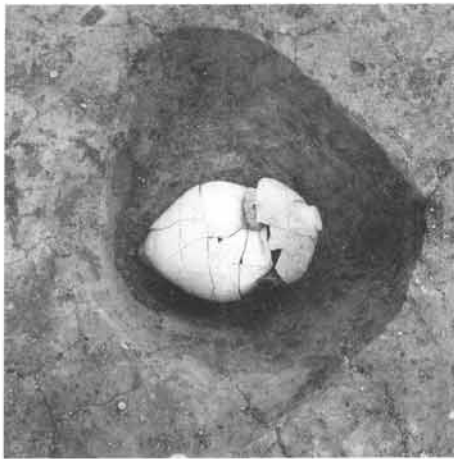
旧吉備中学校校庭遺跡の発掘調査

周知の遺跡である旧吉備中学校校庭遺跡の範囲内とその東側に下水処理施設が建設されるのに伴い周辺地域が大規模に開発されることになった。今回は二カ年に亘る調査の初年度で2936㎡を対象に発掘調査を実施した。

調査の結果、弥生時代後期、古代、中世と大きく分けて3時期の遺構を検出した。

【弥生時代後期】

弥生時代の遺構には後期中頃から後期末頃にかけての竪穴住居7棟（竪穴住居1～7）、溝状遺構4条（溝1～4）、土器棺墓1基などがある。後期中頃から後期後半頃にかけての竪穴住居は円形で調査区の中ほどに集中している。これらのうち竪穴住居3が直径約9.7m×9.1m、竪穴住居6が9.0m×8.7mで集落内では大きな住居である。各住居は壁際に溝を巡らし、中央には炉を備えており、竪穴住居2は炉の周囲に一段高い堤を築いていた。上屋を支える主柱は規模が小さいもので4本、大きいもので10本程度あることが分かった。また、竪穴住居1からは土器が廃棄された状態で多量に出土している。弥生時代後期末頃の竪穴住居は方形で、1棟（竪穴住居5）のみ検出している。壁際にベッド状遺構と言う一段高い空間を備えている。遺物は各住居から土器類が出土しており、特筆できる遺物としては竪穴住居3の管玉、竪穴住居7の鉄製品がある。



土器棺墓

ら土器類が出土しており、特筆できる遺物としては竪穴住居3の管玉、竪穴住居7の鉄製品がある。

溝1～3は3mと5mの間隔を空けて東西に延びており、確認調査の結果100m以上東まで続いていることが明らかになっている。

土器棺墓は竪穴住居7の床面で検出した。住居の南東隅の柱位置に、柱を抜取った後60cm×60cm、深さ約30cmの土坑を掘削し、その中に鉢で蓋をした甕を横たえていた。土坑の上には標石と考えられる大きな石が2個据えていた。石には朱の痕跡が見られるが、これは竪穴住居で使っていた朱を磨り潰した石を転用した

ものであると考えられる。

【古代】

古代の遺構には掘立柱建物8棟（掘立柱建物1～8）・竪穴遺構1基（土坑1）・土坑（土坑2・5）などがある。

掘立柱建物1～5は柱を据える掘形が長さ・幅50～70cmと大きく、柱は痕跡から直径20cm程度である。これらのうち正方形プランで総柱の掘立柱建物2～4は倉庫の可能性が考えられる。

掘立柱建物 6～8 は柱を据える掘形が直径30cm前後の円形である。遺物などから掘立柱建物 1～5 より新しい時期が考えられる。掘立柱建物 7 は桁行 6 間 (12.0m)、梁行 3 間 (7.0m) と大規模な建物である。建物内の南西部で検出した土師器皿を十数枚使った地鎮遺構は、掘立柱建物 7 に伴う可能性が考えられる。

古代の遺物には須恵器、土師器、黒色土器などがある。

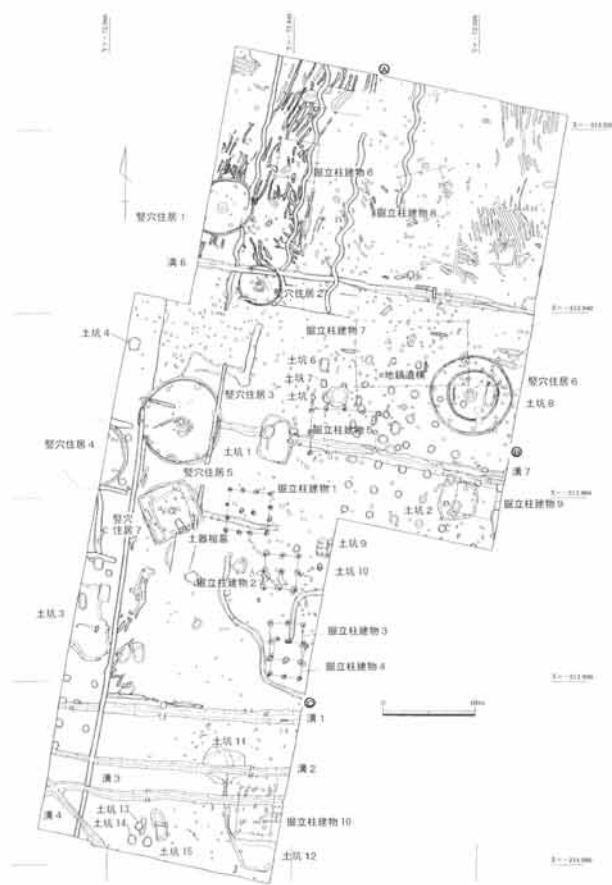
【中世】

掘立柱建物 2 棟 (掘立柱建物 9・10)・土坑 (土坑 6～15)・溝 (溝 6～8) のほか耕作に伴うと考えられる鋤溝がある

溝 6～8 はほぼ一直線に平行に伸びており、水田に関わるものであった可能性がある。土坑 6～10 は大きな礫が落ち込んだ状態で出土しており、形状や断面観察からも土坑墓であった可能性がある。また、土坑 11 と土坑 12 は浅い窪み状を呈し溝で繋がっている。焼土塊が多く出土し遺物から 13 世紀頃のものと考えられるが、性格は不明である。この土坑に隣接する掘立柱建物 9 も、覆土から同時期のものであると考えられる。

中世の遺物には土師器、東播系土器、瓦器、青磁などがある。

(川崎 雅史)



遺構全体図



全景写真

野田地区遺跡の発掘調査

高速自動車国道近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う野田地区遺跡の発掘調査は2006年1月から3月にかけておこなった。調査区は橋脚部のⅠ-A区と側道部のⅡ区に分かれる。

今回の調査区は1980年度に近畿自動車道建設に伴い発掘調査が実施された地区の東隣に位置する。この時の調査では4区の沖積地で弥生時代末から中世にかけての自然流路や溝が検出され、多くの土器類や木製品が出土した。また、段丘上に立地する5～7区では中世の遺構・遺物が見つかった。



調査区位置図

Ⅰ-A区は段丘と沖積地の境目付近に位置する。調査面積は73㎡である。南東隅で北西側に向かって下る段丘面を確認した。現状では段丘部と沖積地はほぼ同じ高さとなっているが、これは近世以降のことであり、古墳時代初頭頃には段丘部と沖積地の比高差は約3mを測る。



Ⅰ-A区

調査は近世以降の堆積層を重機により掘削し、それより下を層位ごとに掘り下げ、時期の確定を行うとともに遺構検出をおこなった。検出した遺構には、近世の溝状遺構（遺構1）、中世の落ち込み（遺構2・3）、古墳時代前期の落ち込み（遺構4）がある。

遺物は段丘寄りの沖積層から古墳時代初頭から前期にかけての土器類が多量に出土しているのをはじめ、遺構4から木製品（机など）が出土している。



Ⅰ-A区 遺構4 木製品出土状況

Ⅱ区は立地が段丘上で、調査面積は約609㎡を測る。調査区は北東隅付近のみ表

土下約30cmで地山となるが、他の部分は一段低く南に向かって緩やかに下っている。この低地は地均した後、近世以降連綿と水田として利用されたことが窺え、水田の区画に関わる石垣や畦畔を確認することができた。

一段高い北東隅付近で中世の柱穴、土坑、溝状遺構などを検出した。また、調査区の南側の低地には、細かくなった瓦器を多く含む層が堆積し、その下部で不定形の落ち込み（遺構31）を検出した。遺構31は東西10m以上、南北は西側で8m、東側で1.5mを測る。深さは約20～30cmで、底面は平坦である。肩付近には4～10cm程度の丸太杭が北側では間隔を空けて、南側では密に打ち込まれている。遺物には瓦器、土師器、青磁、白磁、瓦などがある。

I-A区では遺構からの遺物は少なかったものの、沖積層から古墳時代前期の布留併行期の土器を中心に多くの土器が出土している。これらは段丘近くに集中し、摩滅も少なく完形品もあることなどから段丘上から転げ落ちた、あるいは段丘上から投棄したものであると考えられ、極近距離に集落が存在したことが窺える。古墳時代以前の土器には、大きく分けて布留併行期と庄内併行期の土器があり、これらは無遺物層を境に明確に分けることができる。布留併行期の土器が出土する層位は厚く、また上部では布留併行期の土器に陶質土器が伴い、下部では陶質土器が伴わないことが確認されている。土器を十分観察していない段階の予察であるが、土器を層位ごとに分別すれば、在地色が強い布留併行期の土器の編年が可能であろう。

陶質土器は1980年度の調査の分も含めて壺、はぞう、甕、器台などが一定量出土している。和歌山県では紀の川下流域が紀氏との関わりから陶質土器が多い地域として知られるが、それより以南の主だった川の流域にも、やはり陶質土器が出土する遺跡が存在する。これらを、ただ土器のみが動いたと捉えるか、渡来人の移住があったと捉えるかは、古墳文化が地域に広がる過程を考えていく上でも興味深いことである。

木製品の机は1枚の天板と2枚の脚板で構成されるもので、今回出土したのは天板の約半分である。復元すれば長さ61cmになると推定できる。裏側は周囲が薄くなるようにカットされており、厚い中央には短辺に並行な2本の溝を彫り、その溝に板状の脚部を2枚挿入して組み合わされるものである。溝の断面は逆台状を呈する蟻溝であることから、側面から脚板を差し込んだものと考えられる。

II区では南側を中心に遺構31などから瓦器や輸入陶磁器などの土器類が出土している。瓦器碗は小型で1980年度調査の報文（1985年発行）にある編年に従えば、14世紀代に位置づけられるもので、隣接して存在する貞和二年（1346）銘の「野田の宝篋印塔」などとも近い年代にある。1980年度調査で4区溝SD-2から14世紀代の笹塔婆や位牌など仏教関係の遺物が多く出土している。調査区付近には観音寺跡があったとされるが、それとの関連も注目される。

（川崎 雅史）

重要文化財 旧中筋家住宅保存修理の設計監理

和歌山市^{ねぎ}禰宜にある旧中筋家住宅の保存修理事業は、平成12年2月に始まった。これまでに長屋蔵、北蔵の修理をほぼ終え、現在は主に主屋と内蔵の修理を進めている。当初の事業計画では平成20年3月に完了予定であったが、16年度策定の保存活用計画にのっとりた未指定文化財修理や、防災設備事業などの関連から、全体の工程を見直した結果、平成22年2月に事業を完了することとし、その事業計画の変更が文化庁より承認された。

平成17年度の工事は、翌年度での主屋素屋根（工事用の仮設屋根）の解体を目標に、屋根葺きとそれに関わる部分の木工事を進めた。中筋家の主屋は三階部分を持つ複雑な屋根形をしており、一番高い部分の三階を仕上げ、三階の足場を撤去しないことには、下の屋根が葺けないところもあった。このため今年度の工事はまず三階を仕上げることとし、晩秋までには棧瓦を葺くことができた。三階が完了したところで三階足場を撤去し、屋根下地の土居葺きを完了させ、続いて土間台所部の本瓦葺きに取りかかっている。

主屋の北西に建つ内蔵は、主屋素屋根に取り込まれている関係上、主屋素屋根解体に向け主屋と平行して修理を進めている。内蔵は比較的健全で、本屋の置屋根は数本の垂木を取り替え、野地板を張り直す程度で、屋根を葺くことが出来た。ところで野地板を張り直すさい、本屋の土屋根面に「明治十九年十一月」のへら書きが発見された。これは建築時に土屋根面を塗り上げたさい、土が柔らかいうちに棒のようなもので書いたものらしい。内蔵の建築年代は不明であったが、これにより明治19年（1886）と判明した。

（御船 達雄）



主屋式台玄関の組み上げ



主屋土居葺きの完了状況



主屋土間台所部の本瓦葺き



内蔵土屋根上のへら書き「明治十九年十一月」

重要文化財 福勝寺本堂ほか2棟保存修理の設計監理

平成17年1月から開始した福勝寺本堂ほか2棟の保存修理事業は、同5月から各建物の解体工事を本格的に進め、今回の修理で必要な部分の解体作業を同12月に完了した。解体に伴う調査により、各建物の修理や改変の歴史が明らかとなった。

本堂は室町時代後期（1500）頃の建立時には未完成のまま使われ始め、永禄十三年（1570）になってようやく天井や外陣の壁、建具が整備された。その後慶安三年（1650）に紀州藩初代藩主徳川頼宣の寄進により求聞持堂が建立された時に、本堂外部に長押など化粧材が取り付けられ、ようやく外観の姿が整えられた。また、この時期に本堂の軒廻りや小屋組が大規模に改修されている。

江戸中期の享保十九年（1734）には屋根の修理がおこなわれ、本堂大棟の鬼瓦や、求聞持堂の露盤が現状の物に替えられた。

江戸後期の文化年間には、中世密教仏堂の特徴である本堂内外陣境の結界が取り去られ、正面廻りの建具が本堂と求聞持堂で一連の意匠のものに取り替えられるなど、建物の使われ方が変わってきたことが伺われる。また、天保年間には本堂の大梁二本を取り替えるなど、小屋組や軒廻りを中心に大規模な修理が施された。

近代に入ってから部分的な修理が繰り返され、大正八年には求聞持堂の各部屋の間仕切りの変更や、新たに仏壇が設けられたほか、取り合い部の増床に伴い、屋根の形が改変された。

各建物の変化は、修験の行場としての性格が色濃い本堂建立時から、紀州藩主の祈祷所として求聞持堂が建てられた江戸初期、熊野参詣の宿泊所や裏見の瀧がある名勝地として、貴人から庶民にまで親しまれた江戸後期、厄除けの名所として地元住民によって守られてきた近代と移り変わる福勝寺の歴史を映し出していることが、堂内の墨書や古文書などに残る記録からも伺われる。

今回の修理事業においては、各建物が本来持っていた特徴を、最もよく表している江戸初期の姿に復することを目指し、現状変更の手續きをおこなった。平成17年11月、文化庁より現状変更の許可がおりたことをうけて、変更箇所復原をふくめた部材の修理工事を進めている。



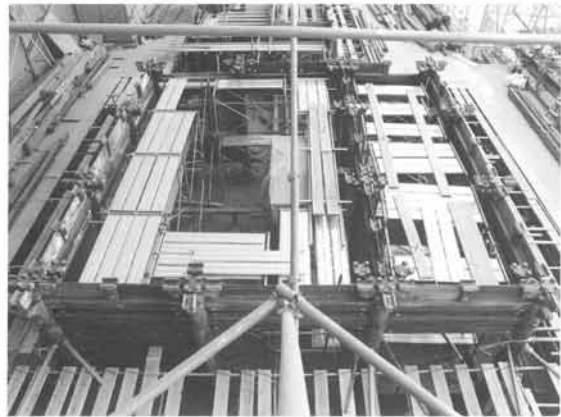
修理前正面図



変更正面図



本堂外陣内部：墨書の状況



本堂：解体状況

工事の進捗に伴い、福勝寺の建物には、時代や地域性を反映した興味深い特色が確認できた。
使用されている木材の材種 本堂の当初材と見られる部材には楠材と松材が主に用いられている。
 江戸初期の求聞持堂の建立や本堂の補修は、紀州藩主の寄進で施工されており、化粧部分には主に梅材が用いられているほか、野物材には椎や栗などの広葉樹が多用されている。

江戸後期の修理も、紀州藩から援助を受けておこなわれているが、寺蔵の古文書には、経費節約のため地元の木を補修材に用いる旨が記されており、松材が多用されている。

松や楠が多用されるのは、当地域の中世後期の建物に特徴的である。本堂の当初材には檜材が一部使用されているが、捻れの大きい不十分な品質の材であり、当時の木材の供給状況が伺われる。主要な柱や組物の一部に樺材が、また初代藩主の肝いりで工事がおこなわれた江戸初期の化粧材には、紀州藩関係の建物に特徴的な良質な梅材が用いられている以外は、いわゆる雑木が多く、山間部に位置する立地条件から近隣で確保できる木材で賄われていたと推測できる。

未完の本堂と墨書 本堂の大きな特徴に、建物内部に記された無数の墨書がある。その大半は室町後期に記された物と見られ、一番古い永正12年（1515）の年紀は本堂の建立時期を推測する重要な資料ともなっている。

調査の結果、建立当初外陣の正側面には壁や建具が未完成であったことが判明し、そのことを反映し、参詣者による墨書が柱や琵琶板を埋め尽くしている。また、天井裏の部材にも墨書が残り、板の裏に記された永禄13年（1570）になって初めて天井が張られたこともわかった。

一方、格子戸で外陣と結界されていた内陣には、梵字も認められる「求聞持法奉修」の墨書が整然と記され、仏堂として使用されていたことが推測できた。

外陣の墨書には永禄以降の年号が認められず、この時期に柱間装置が整備されたと考えられるが、本堂の外観が整うまで、さらに70年を要している。実に建立から150年が経過していることになるが、県下では未完のまま使用された中世や近世の類例建物が報告されており、一つの地域的な特徴となっている。

（多井 忠嗣）

県指定文化財 荒田神社本殿保存修理の設計監理

荒田神社本殿の保存修理事業は、平成13年度より始まり、平成17年度をもってすべての工事を完了した。また、併せて防災設備工事も行った。

17年度は、金具類の製作と取り付け、素屋根の撤去、雨落ちなど周囲の整備を行った。

周囲整備では、修理前に基礎布石に若干の不陸を生じていたことを勘案し、水勾配をとり確実に外部に排水できるよう留意した。また、修理にあたり撤去していた玉砂利を敷き詰め、境内の景観も整えることができた。

今回の修理工事においては、解体中に、①元々は礎石建ちであったが、江戸中期（寛文～元禄か）には柱底部が切断され、布石および土台が挿入されたこと、②階段・浜縁は当初材が残っていないこと、③おそらく近代に入ってから唐破風が撤去され、昭和には桧皮葺きから銅板葺きに変更されたこと、④当初より全体に丹塗りが施されていたが、彫刻類のみは素木であること、などが判明した。古材の残存状況から、礎石建ちや唐破風の形状に復することは無理があったため、今回の施工に当たっては、屋根は桧皮葺き、彫刻および浜縁を除いた全体に丹塗り等の塗装工事を行うにとどめたが、全体に均整のとれた姿に仕上げることができた。

本殿には、のちに江戸幕府の作事方大棟梁となった平之内正信より寄進されたという、狛犬の台座部分が残されている。裏面の銘文は本殿については触れていないが、向拝竜頭型木鼻上面の墨書「屏□（清）左衛門 〈花押〉」から、「屏」すなわち屏之内（＝平之内）一門の関与はほぼ確実であろう。彫刻は躍動的で、彫り物の名手と言われる正信を彷彿とさせる。平之内正信の出自である根来に残された貴重な遺構であるといえる。

また、向拝中央に唐破風をつける（『絵図』および痕跡より）、妻飾りに二重虹梁および指母屋を用いるなど、いずれも大阪府下にて中世から近世にかけて特徴的に見られる工法で、この時代の大工技術の伝播を示すことから、貴重な例であると考えられる。

（鈴木 徳子）



『紀伊国名所図絵』に見る境内は、現在もほとんど変わらない。左下の鳥居には、宝永3年（1706）の銘がある。



南間浮提大日本国紀州那賀群之
 広田庄奉寄進大明神棟瑠之
 駒獅子根来平之内七郎兵衛正信
 武州江城在府之砌東国被贈者
 維寛永元年極月吉日誌之

狛犬台座裏面の銘文。平之内正信が江戸城にいる際に、広田庄の大明神つまり荒田神社に、瑠瑠（タイマイ＝ベッコウ）の駒獅子を寄進したことが記されている。寛永元年（1630）の銘がある。

狛犬は現存していない。



上：妻飾りの詳細。二重虹梁大瓶束、指母屋、絵様付き組物、彫刻などで豪華に飾り立てられている。

左：彫刻類。上より、亀に乗る仙人（本殿正面葺股）、龍（向拝葺股）、牡丹（向拝手挟み）。葺股は桧材、手挟みは楠材を使用。いずれも肉厚で躍動感があり、且つ、細部は爪や葉脈に至るまで繊細に彫り込まれている。

重要文化財 那智山青岸渡寺本堂保存修理の設計監理

那智山青岸渡寺は、那智勝浦町の那智山に熊野那智大社と並んで位置し、西国三十三箇所第一番の観音霊場として人々に親しまれている。本堂は、天正9年（1581）の兵火により焼失した後、天正18年（1590）豊臣秀吉によって再建された。桁行九間、梁間五間、一重、入母屋造、向拝一間、こけら葺の建物である。建築後約20～30年間隔で屋根葺替等の修理が行われ、大正14年（1925）に解体修理が、さらに昭和37年、昭和60年に屋根葺替工事と部分修理が行われている。前回の葺き替えからは18年しか経過していないものの、日照・湿度等の条件が悪いため、破損が認められるようになり、向拝廻りでは雨漏りが見られ、野地の露出が確認できる部分もでてきた。その都度部分的に補修が行われてきたが、平成16年には2度の台風による被害を受け全面葺き替えの必要が生じた。

平成18年3月から10ヶ月の計画で、正面側の屋根葺替修理が行われることとなり、17年度は、事業の着手準備とこけら板の拵えを実施した。平成18年度も引き続きこけら板の拵えを行い、現場での葺き替え工事は平成18年8月下旬からの予定である。

（寺本 就一）



屋根の葺き替えが待たれる那智山青岸渡寺本堂

史跡 和歌山城御橋廊下復元工事の工事監理

御橋廊下は、和歌山城の二之丸と西之丸を区切る幅約26mの堀に架かる橋であるが、屋根や壁が造られ廊下のようになっているところから、このように呼ばれたらしい。二之丸と西之丸の石垣の高さには約3.5mの高低差があるため、この廊下橋は斜めに造られており、特異な構造と形態の建物となっている。

御橋廊下は、和歌山城を描いた古絵図や御橋廊下そのものを描いた建築古図からその存在が知られていたが、平成11年に堀底を調査したところ基礎石などの遺構が確認されたことにより、復元に向けての具体的な検討が始められた。

センターでは発掘遺構と伝来する建築古図「御橋廊下御差図」を基に、平成13年度で復元に向けての基本設計を、翌14年度で詳細にわたる実施設計を行った。設計に際しての懸案は、現状の堀幅や発掘遺構と、伝来する建築古図の間に、少なからず誤差が見られ、建築古図の信頼性やその製作意図の解明が課題となった。御橋廊下は、周辺の発掘調査の結果、文化10年（1813）の大奥の火災に類焼していると判断され、「御橋廊下御差図」に図法上の錯誤が見られるのは、火災焼失後の再建計画のための下図であるからと推定した。その後この計画図通りに再建されたかどうかの確証は得られないが、復元設計に当たっては発掘結果を第一に尊重し、この「御差図」の作図意図をくみ取り、錯誤を正した。細部の意匠や納まり、使用木材の材種など、再建に当たっての具体的な建築手法については、江戸後期の紀州藩が関わった建築物の遺構例（養翠亭、西浜御殿、十禅律院庫裏）を参考とした。

復元に当たっては、建築様式だけではなく、建築の工法も伝統技法の再現を目指したが、基礎部分は遺構の保護と構造強度の確保のために鉄筋コンクリート造とし、木造の軸組にも部分的に構造補強のための金具を製作して取り付け、安全性の確保を目指した。

復元の工事は平成15年10月に着手し、平成18年3月に完成した。 （鳴海 祥博）



工事中の状況



竣工 内部

太田・黒田遺跡出土の管玉 2 種

はじめに 平成17年度に実施した太田・黒田遺跡（県1次）調査で弥生時代の異なる形状をした管玉が2点出土したのでここで紹介する。これらは両者とも緑色凝灰岩製と考えられる。

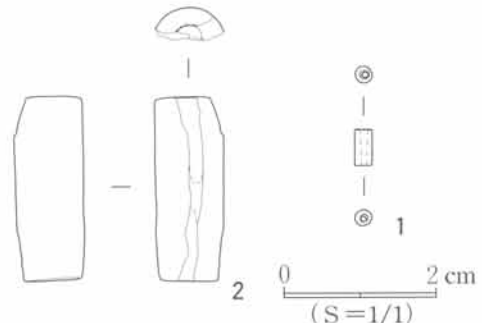
B区遺構300の管玉（1） 遺構300は焼失した堅穴住居で、住居埋土の焼土・炭化材を含む層から管玉が1点出土した。埋土からの出土で、厳密には住居で使用していたことを傍証できないが、限りなく住居に伴う可能性が高いと考えている。長さ5.0mm×径2.0mmで小形品といえる。完形品で両端面とも研磨されている。孔径は上端側1.0mm・下端側0.8mm。上下で孔径が違うことから上端側からの片面穿孔と推察できる。

A区遺物包含層第4層の管玉（2） 弥生時代中期後葉の遺物包含層と考えている第4層から管玉が1点出土した。今回の調査では遺物の大半が弥生時代中期中葉～後葉の所産で、少量ながら弥生前期末～中期前葉の遺物が出土している。弥生時代後期の遺物は出土していない。このことから第4層から出土した管玉は、弥生時代前期末～中期前葉の可能性を残しながらも、弥生時代中期中葉～後葉の遺物と推測できる。この管玉は上下端部が残存しているが、縦に割れてほぼ半分が欠損している。（1）に比べて大きく、長さ24.0mm×残存幅9.0mmをはかる。残存孔径は3.0mmで、幅・孔径ともに本来はもう少し大きい。穿孔は両面から施されている。

既往調査の管玉 当遺跡ではこれまで管玉が5点報告されている。未報告の2点は実態がわからない。形状のわかる3点は、報告書では出土状況から古墳時代の所産と推定される。いずれの調査でも弥生時代の遺構・遺物が確認できるため、弥生時代の管玉である可能性も残る。

県内の管玉 県内の弥生時代を中心とした玉類を集成した。最も古い管玉は弥生時代前期のもので、堅田遺跡から2点出土している。溝ノ口遺跡で縄文時代の管玉が確認できるが、エンタシス状で弥生時代以降の形態とは違う。弥生時代中期では出土数は多くなるが、当遺跡を含めても4遺跡にとどまる。弥生時代後期になると出土数は増加し、古墳時代初頭にかけて広く認められるようになる。古墳時代中期以降は滑石製模造品と共伴して緑色凝灰岩製管玉が出土する例が多い。管玉未成品（船岡山、吉田遺跡）や勾玉未成品（吉田、北田井遺跡）があり、弥生時代後期に紀ノ川流域で製作していた可能性が高い。

管玉2種の評価 今回出土した管玉は、当遺跡において確実に弥生時代に属する管玉の初例として意味を持つ。特に（1）は県内における弥生時代の管玉の中で最小といえる点で貴重な資料といえる。これら形態の違う2種類の管玉がほぼ同時期に使用されていたことは、消費地における使用実態を示す好例となる。（仲原 知之）



太田・黒田遺跡(県1次)出土管玉

関連研究

和歌山県内出土 弥生時代（～古墳時代）玉類集成表

遺跡名	所在地	種類	遺物番号	石材	法量 cm (長×径/孔径)	年代	報告書	出土状況/備考
太田・黒田	和歌山市	管玉	1	緑凝	0.5×0.2 : 0.1	弥生中期	本稿	B区遺構300住居/県1次
太田・黒田	和歌山市	管玉	2	緑凝	2.4×残0.9 : 0.3	弥生中期	本稿	A区包含層第4層/県1次
太田・黒田	和歌山市	管玉	未報告			古墳か?	森・白石1969	/市予備1次・2次調査
太田・黒田	和歌山市	管玉	未報告	緑凝		古墳か	和市文体事1995	/記述のみ 市第14次
太田・黒田	和歌山市	管玉	20F887	緑凝	2.1×0.6 : 0.2	古墳か	和市文体事1998	第7層最上部/市第43次
太田・黒田	和歌山市	管玉	20F888	緑凝	残1.6×1.2 : 0.4	古墳か	和市文体事1998	SK-1最上層/市第43次
太田・黒田	和歌山市	管玉	21F68	緑凝	残2.0×1.3 : 0.35	古墳か	和市教委2003	SD-01a(中世)/市第50次
堅田	御坊市	管玉	135F1609	緑凝	0.99×0.53 : 0.25	弥生前期	御市文調会2002	土坑1510/片面穿孔, 原産地分析
堅田	御坊市	管玉	135F1610	緑凝	0.95×0.47 : 0.2	弥生前期	御市文調会2002	土坑1510/片面穿孔, 原産地分析
柏原	橋本市	管玉	図版4-17	緑凝?	2.5×0.8 : 0.25	弥生中期	橋市遺調会1996	落ち込み1/
柏原	橋本市	管玉	図版4-18	緑凝?	4-17とほぼ同大	弥生中期	橋市遺調会1996	落ち込み1/ 欠損品
血繩	橋本市	管玉	7 F15	緑凝	1.2×0.4 : 0.2	弥生中期	橋市教委1986	SD04/両面穿孔
船岡山	かつらぎ町	管玉	113F105	未	2.55×1.29 :	弥生中期	県教委1986	住居SB10柱穴6/柱状多面体, 未穿孔
吉田	岩出町	管玉 6点	21頁写真	緑凝		弥生後期	県教委1971a	住居55/勾玉・管玉未ととも出土
吉田	岩出町	管玉 4点	21頁写真			弥生後期	県教委1971a	住居55/勾玉・管玉未ととも出土
西田井	和歌山市	管玉	175F1046	緑凝	3.45×1.5 : 0.35	弥生後期	県文セ1991b	住居SI163埋土/勾玉1点ととも出土
西田井	和歌山市	管玉	175F1049	緑凝	1.0×0.4 : 0.2	弥生後期	県文セ1991b	住居SI163埋土/勾玉1点ととも出土
西田井	和歌山市	管玉	175F1047	緑凝	2.8×1.0 : 0.4	弥生後期	県文セ1991b	住居SI164埋土/
西田井	和歌山市	管玉	243F644	緑凝	1.4×0.28 : 0.1	弥生後期	県文セ1991b	SK626/
西田井	和歌山市	管玉	243F645	緑凝	残1.3×0.25 : 0.1	弥生後期	県文セ1991b	SD702/
西田井	和歌山市	管玉	175F1048	滑石	2.6×0.5 : 0.2	弥生後期	県文セ1991b	住居SI186埋土/
阿須賀	新宮市	管玉				弥生後期?		2次/
阿須賀	新宮市	管玉	22F3	蛇	4.2×1.0 : 0.3	弥生後期か	新市教委1982	4次調査ヒット/
川辺	和歌山市	管玉 3点	未掲載	緑凝		古墳初期	県文セ1992	V区上面SD01中層/黒石氏御教示(報告書未掲載)
旧吉備中学校	吉備町	管玉	未報告	緑凝	1.3×0.35 : 0.1	古墳初期	佐伯田崎岡氏御教示	住居600床面/2個体の可能性あり
中村地区	御坊市	管玉	88F686	粘	1.04×0.3 : 0.1	古墳初期	御市文調会1995	8号墳床面下/片面穿孔, 集落に伴う?
太塚	南部町	管玉	29F475	緑凝	1.0×0.35 : 0.1	古墳初期	南町教委2002	竪穴住居5/
北田井	和歌山市	管玉	19F2	緑凝		古墳前期	県教委1971b	21号住居床面/
岡村	海南市	管玉	未掲載	緑凝	2.3×0.7 :	古墳前期?	海市教委2004	遺物包含層/
岡村	海南市	管玉	未掲載			弥生～古墳?	海市教委・市研会1980	19地点ヒット/
岡村	海南市	管玉	未掲載			弥生～古墳?	海市教委・市研会1980	224地点II層/
船岡山	かつらぎ町	勾玉	113F104		4.0×厚0.95 : 0.6	弥生中期	県教委1986	住居SB07柱穴3/両面穿孔
吉田	岩出町	勾玉 濁数	21頁写真			弥生後期	県教委1971a	住居9/勾玉・ガラス玉ととも出土
吉田	岩出町	勾玉 未6点	21頁写真			弥生後期	県教委1971a	住居9/勾玉・ガラス玉ととも出土
吉田	岩出町	勾玉 2点	21頁写真	方		弥生後期	県教委1971a	住居9/勾玉・勾玉未ととも出土
吉田	岩出町	勾玉	21頁写真			古墳前期	県教委1971a	住居17/
吉田	岩出町	勾玉	21頁写真			弥生中期	県教委1971a	住居55/管玉未・管玉未ととも出土
北田井	和歌山市	勾玉	17F5			弥生後期	県教委1971b	2号住居覆土/
北田井	和歌山市	勾玉 未	未掲載			弥生後期	県教委1971b	3号住居床面/
西田井	和歌山市	勾玉	175F1045	緑凝	4.3×厚1.4	弥生後期	県文セ1991b	住居SI163埋土/管玉1点ととも出土
岡村	海南市	勾玉	図版16-27	瑪瑙	長2.4	弥生?	海市教委1991	D地点第4層/
血繩	橋本市	勾玉	1 F4	蛇	4.3×厚1.3 : 0.3	弥生後期か	県教委1978	
佐野	かつらぎ町	勾玉	未掲載	蛇		弥生?	県文セ・県文研1977	西側基礎版築土内/
荒田	岩出町	丸玉	57F504	方	0.45×0.8 : 0.25	弥生中期か	県文セ2001	C区側溝(近世含む)/
中村地区	御坊市	小玉	88F687	方	2.3×4.9 : 0.1	弥生後期～古墳前期	御市文調会1995	住居SB1F
中村地区	御坊市	小玉	88F688	方	2.3×3.3 : 0.1	弥生後期～古墳前期	御市文調会1995	住居SB1F
鳴神貝塚	和歌山市	丸玉	21F10	翡翠	0.35×0.6 : 0.1	縄文時代	県教委1968	包含層III層上部/両面穿孔
溝ノ口	海南市	管玉	69F6	翡翠	1.3×0.5 : 0.2	縄文時代	海市教委1984	縄文後期包含層/両面穿孔, 欠損品
溝ノ口	海南市	丸玉	69F6	翡翠		縄文時代	海市教委1984	縄文後期包含層/合計7点
溝ノ口	海南市	勾玉	27F208	蛇		縄文時代	県文セ1997	遺構714/
船岡山	かつらぎ町	玉	64FJS27	翡翠	5.45×1.25 : 0.8	縄文時代	県教委1986	SD6中層4層/片面穿孔
秋月	和歌山市	管玉	57F419	緑凝	残2.0×0.8 : 0.3	古墳中期	和市文体事2000	SK62/滑石製白玉点ととも出土
鳴神V	和歌山市	管玉	35F157	緑凝	残1.3×0.4 : 0.2	古墳中期か	和市文体事1994a	包含層6層/片面穿孔
平尾	和歌山市	管玉	16F339	緑凝	残0.2×0.4 : 0.1	古墳中期	和市文体事1994b	/白玉に転用の可能性
平尾	和歌山市	丸玉	16F440	方	0.2×0.4 : 0.15	古墳中期	和市文体事1994b	SD1/
音浦	和歌山市	管玉	8 F300		3.0×0.5 : 0.3	古墳中期	県教委1972	溝2(古墳中期以降)/滑石製紡錘車出土
鳴神地区	和歌山市	管玉	43F11	緑凝	0.96×0.26 : 0.1	古墳中期?	県教委1984	B区中世構成土/滑石製紡錘車出土
鳴神地区	和歌山市	管玉	144F61	緑凝	3.2×0.9 : 0.3	古墳中期?	県教委1984	SK271/両面穿孔, 両面穿孔, 滑石製白玉出土
鳴神地区	和歌山市	管玉	161F9	緑凝		古墳中期?	県教委1984	J地区包含層3層/両面穿孔, 滑石製白玉等出土
鳴神地区	和歌山市	管玉	232F	?	2.5×0.5 : 0.2	古墳中期?	県教委1984	M地区SK209/
鳴神地区	和歌山市	管玉	237F12	?	2.5×0.5 : 0.2	古墳中期	県教委1984	N地区SD117/
西田井	和歌山市	小玉	175F1050	緑凝	0.35×0.45 : 0.15	古墳中期	県文セ1991b	住居SI188遺床面/
西田井	和歌山市	小玉	175F1051	緑凝	0.25×0.45 : 0.15	古墳中期	県文セ1991b	住居SI188遺床面/
西庄	和歌山市	管玉	21F85		2.6×0.6 : 0.3	古墳中期か	県文セ2003	C区473SP/
西庄	和歌山市	勾玉	26F180		2.6×0.9 : 0.15	古墳中期か	県文セ2003	C区包含層III層/滑石製有孔円板・金環出土
西庄	和歌山市	勾玉	37F314	緑凝	5.0×1.2 : 0.4	古墳中期か	県文セ2003	D区包含層III層/
西庄	和歌山市	切子玉	37F312	緑凝	1.3×1.1 : 0.3	古墳中期か	県文セ2003	D区包含層III層/滑石製手持勾玉出土
西庄	和歌山市	管玉	44F408		3.0×0.4 : 0.25	古墳後期	県文セ2003	E区5号竪穴/
西庄	和歌山市	管玉	49F460		1.5×0.35 : 0.1	古墳後期	県文セ2003	E区7号竪穴/滑石製白玉55点出土
西庄	和歌山市	管玉 8点	60F4613 -620		2.0×0.5 : 0.2	古墳後期	県文セ2003	E区10号竪穴/8点ともほぼ同形, 滑石製白玉・銅形・円板出土
西庄	和歌山市	管玉	71F728		2.1×0.8 : 0.3	古墳中期	県文セ2003	E区包含層III層/片面穿孔
西庄	和歌山市	管玉	78F857		3.2×1.4 : 0.3	古墳中期か	県文セ2003	E区包含層III層/滑石製有孔円板・紡錘車出土
西庄	和歌山市	勾玉	78F856		残3.3×厚1.3 : 0.3	古墳中期か	県文セ2003	E区包含層III層/滑石製有孔円板・紡錘車出土
西庄	和歌山市	白玉	176F2074	方	0.3×0.4 : 0.2	古墳中期か	県文セ2003	H区2号竪穴/滑石製有孔円板・白玉出土
下	下津町	管玉	21F215	緑凝	3.0×0.6 : 0.2	?	下町教委1983	遺構面出土/片面穿孔, 滑石製紡錘車出土
向屋敷	串本町	丸玉		方		古墳	県文セ1991a	

*未=未成品, 緑凝=緑色凝灰岩, ガ=ガラス, 粘=粘結岩, 蛇=蛇紋岩, *石材は報告書の記載による。ただし碧玉と報告されているものは緑色凝灰岩と表に記載している。
 *県内の滑石製玉類集大成は前田敬彦2005「生産遺跡における滑石製品」『第54回縄文文化財調査報告書 古墳時代の滑石製品』を参照。*所在地については平成6合併前の市町村名を使用している。
 *周溝溝・古墳等の墳墓から出土する玉類は集成から除外している。*土玉を出土する遺跡もあるが発見し且鑑定できないので集成から除外している。
 *片山遺跡(南部町)：古墳初期の周溝溝の周溝から管玉7点・勾玉1点のみとまとまっていた。(県文セ1981) *尾ノ崎遺跡(御坊市)：古墳前期の周溝溝から玉類多数出土。(御市遺調会1981)

【出典】海南市教委・海南市文化財調査研究会1980「岡村遺跡発掘調査報告書」、海南市教委1984「溝ノ口遺跡1」・1991「海南市内遺跡発掘調査報告書」・2004「海南市内遺跡発掘調査報告書平成15年度」、御坊市遺跡調査会1981「尾ノ崎遺跡」、御坊市文化財調査会1995「中村地区遺跡発掘調査報告書」・2002「堅田遺跡」、下津町教委1983「下津遺跡第3次発掘調査報告書」、新宮市教委1982「紀伊・阿須賀遺跡第3・4・5次発掘調査」、橋本市遺跡調査会1996「平成7年度柏原遺跡発掘調査報告書」、橋本市教委1986「血繩遺跡発掘調査報告書」、南部町教委2002「太塚遺跡」、和歌山県教委1968「和歌山県文化財調査報告書第三冊」、1971a「吉田遺跡第2次調査報告書」、1971b「和歌山市北田井遺跡発掘調査報告書」、1972「日本道路公団近畿支隊和歌山線理文化財調査報告書」、1978「紀の川川本建設事業に伴う発掘調査報告書」、1984「鳴神地区遺跡発掘調査報告書」、1986「船岡山遺跡発掘調査報告書」、和歌山県教委(社)和歌山県文化財調査会1977「佐野庵寺発掘調査報告書」、1981「片山遺跡C-D地点発掘調査報告書」、(財)和歌山県文化センター1991a「宮地遺跡」、1991b「西田井遺跡発掘調査報告書」、1992「年報1991」・1997「溝ノ口遺跡発掘調査報告書」、2001「尾ノ崎遺跡発掘調査報告書」、2003「西庄遺跡」、和歌山県教委2003「和歌山県内遺跡発掘調査報告書平成13年度」、(財)和歌山県文化財調査研究会1994a「鳴神V遺跡発掘調査報告書」、1994b「平尾遺跡発掘調査報告書」、1995「太田・黒田遺跡第26次発掘調査報告書」、1998「太田・黒田遺跡第43次発掘調査報告書」、2000「林下遺跡第8次発掘調査報告書」、森浩一・白石太郎1969「南近畿における前・中期新石器土器の一種相」『考古学ジャーナル』33

平成17年度事業で行った普及活動をふりかえって

本年度も発掘調査や整理の現場には、多くの市民を招くことができた。その場での声や質問、アンケートの回答、感想文といった生の反応に私たちは素直に一喜一憂した。例年、発掘調査事業を通して、文化財保護の普及啓発・活用事業に、新たな方法がないか模索していたが、今年度はいくつかの新たな試みを実施できた。キーワードは「積極的な広報と公開」、「教材としての活用」の二つである。

太田・黒田遺跡の発掘調査事業では、現場が市街地の中心に位置し、請負業者の理解と支援も受けることができたため、安全管理を徹底しつつ、発掘調査現場の常時公開を実施した。通常の現地説明会に加えて、現場への案内板を設置、市民の発掘調査現場自由見学、出土遺物の展示、調査員の解説、パンフレットの常備9回の更新を実施し、タイムリーな解説となるよう努めた。



太田・黒田遺跡現地公開の様相

水軒堤防の発掘調査事業では、検出した遺構の性格から、近い将来の発生が懸念される

東南海地震に備える防災のシンボルとして、シンポジウム、現地説明会の開催、地元高校生の現地見学会受入れ、新聞・テレビ番組などのメディア、公式ホームページでの公開を含めたインターネット上での周知にも努めた。



水軒堤防現地説明会の様相

出土遺物整理作業体験学習会を行った。各会ではアンケートを配布し、寄せられた多くの意見に喜びつつ、説明会参加者に世代間の隔たりが大きいことや、広報のあり方など課題も明確にできた。今後さらに地域、県外にも情報を発信し、地域社会や、市民の生涯学習に文化財を還元できるよう努めていきたい。（村田 弘）



海南整理事務所での体験学習

文化財建造物保存修理に伴う普及活動

文化財建造物の保存修理事業においては、工事を計画的に施工し、解体した部材などを保護するために、素屋根など仮設物で建物を覆って工事を進めている。このため事業期間中は、一般の人が建物を直接目にする機会が限られてしまう。しかし素屋根の中では、普段目にする事ができない解体・組立途中の姿が、仮設足場の間近で展開されている。この貴重な機会を生かして、事業の内容や工事に伴い新たに得ることができた知見などを発信し、文化財建造物の理解を深める手助けになるよう、修理現場の公開を中心とした普及活動を行っている。

平成17年1月に事業を開始した海南市下津町の福勝寺本堂ほか2棟の修理現場においては、これまでに三回の現場公開を催した。第1回目は、4月上旬の素屋根完成に伴い、地元橋本地区の住民を対象におこなった。これは住民による現場作業協力の申し出に答える形で開催されたもので、単に見学会というだけでなく、瓦屋根部分の破損状況や、瓦の時代区分などを中心に、文化財に対して十分な理解をもって解体作業にあたるよう、現場担当者が解説をおこなった。

第2回目は、平成17年4月に旧下津町と合併した海南市の主催により、本堂、求聞持堂の解体が進んだ8月末に開催した。インターネットを利用した告知を行ったこともあり、県内外からの100名を超える参加者に、迫力ある小屋組や軸組の姿にふれてもらうことができた。

10月の行楽シーズンにおこなった第3回目は、熊野古道ハイク（海南市主催）に併せて、現場をイベント参加者に公開した。福勝寺と熊野参詣道の関わりは深く、広く一般の人が文化財建造物の修理現場にふれられる良い機会となった。

檀家を持たない福勝寺は、紀州藩などの庇護を受けながらも地元住民によって守られてきたことが古文書などに記されている。この伝統の継承を意識して、今回の事業においても地元住民は現場の作業や公開の協力を極めて積極的である。一般公開の際には、解体作業にたずさわった人が、自然と参加者に建物や工事内容の解説を行うなど、その活動の成果は直実に実っている。文化財を保持していく足元を固めることこそが、普及活動の第一歩であると実感される。（多井 忠嗣）



現場一般公開の状況



地元住民参加による屋根瓦解体

(財) 和歌山県文化財センター平成17年度概要

I 受託事業

埋蔵文化財発掘調査受託事業 4件 文化財建造物保存修理設計監理事業 11件
埋蔵文化財遺物整理等受託事業 6件

II 会議など

理事会 評議会	理事会 役員会・評議員会 理事会・評議員会	平成17年 4月28日(木) 平成17年 5月27日(金) 平成18年 3月27日(月)	文化財センター会議室 ホテルアバローム紀の国 和歌山商工会議所
全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係		文化財建造物関係	
(1) 総会 (熊崎・渋谷)	17.06.09-10 富山市新総曲輪 富山県民会館	(1) 建造物保存修理事業監督者会議 (鳴海)	17.04.18 東京都 文部科学省
(2) 研修会 (井石・松尾)	17.10.20-21 北九州市 ウエルシティ小倉	(2) 建造物保存事業幹部技術者研修会 (鳴海)	17.04.19 東京都 学士会分館
(3) 近畿ブロック会議 (熊崎・松尾)	18.02.17 大津市 滋賀県民交流センター	(3) 建造物保存修理関係者等連絡協 議会(鳴海・多井・鈴木・御船)	17.10.11 東京都 東京大学弥生講堂
(4) 近畿ブロック事務担当者 会議(熊崎・西本・松尾)	17.11.02 和歌山市 アバローム紀の国	(4) 建造物保存事業主任技術者等連 絡協議会(鳴海・鈴木・御船)	17.10.12-13 東京都 東京大学弥生講堂
(5) 第31回近畿ブロック主担 者会議(渋谷・村田)	17.07.08 京都市 ルビノ京都堀川		
・第32回近畿ブロック主担 者会議(渋谷・井石)	17.02.10 京都市 京都市埋蔵文化財研究所		
(6) 第1回O A委員会 (仲原)	17.07.22 向日市 向日市埋蔵文化財センター		
(7) 近畿ブロック研修会 (佐々木)	17.10.07 奈良市 奈良県文化会館		

III 講師派遣・執筆など

埋蔵文化財関係		文化財建造物関係	
17.04.16	和歌山地方史研究会連続講座「根来を知ろう!」 第1回「根来寺発掘調査の成果」(村田 弘)	17.04.24	和佐歴史研究会総会「旧中筋家住宅の修復状 況について」(寺本就一)
17.05	「高野山の大門に関する二、三の考察」 『立命館大学考古学論集』(丹野 拓)	17.05.15	和歌山地方史研究会連続講座「根来を知ろう!」 第2回「根来大工と根来の建築」(鳴海祥博)
17.06.25	近畿弥生の会「野上中南遺跡の発掘調査-弥生 時代中期前半の集落-」(丹野 拓)	17.05.20	文化財建造物修理技術者養成研修 (於旧中筋家住宅)
17.08.31	「瓦からみた寺社・官衙の動向-平安時代の紀 ノ川下流域を中心に-」『紀伊考古学研究』 第8号 紀伊考古学研究会刊(丹野 拓)	17.05.22	万葉薪能の会「和歌浦天満宮東照宮見学会」 (鳴海祥博)
17.09.13	「和歌山県の動向」『中世史・考古学情報』第4号伊 勢中世史研究会刊(丹野 拓・北野隆亮共著)	17.06.05	和歌山地方史研究会連続講座「根来を知ろう!」 第3回「根来寺の門前町を歩く」(鈴木徳子)
17.09.13	FUJITSUファミリー会議講演「発掘調査と出土品 を通して知る紀州の歴史」(仲原知之)	17.07.31	和歌山建築士会「古建築見学会」(鳴海祥博)
17.10.15	古代学研究会 「弁天山古墳の発掘調査-紀伊中部の横穴式石 室-」(丹野 拓)	17.09.14	海南市下津歴史民俗資料館 「重要文化財岩屋山福勝寺展」展示協力
17.11.27	土木遺産研究会 「和歌山県指定史跡「水軒堤防」の発掘調査」 (仲原知之)	17.10.06	「建築ジャーナル」座談会(鳴海祥博)
17.12.03	関西近世考古学研究会	17.10.28	南葵史談会「根来の町並み」(鈴木徳子)
17.12.04	「和歌山県指定史跡「水軒堤防」の石積み構築 技術と石材」(仲原知之)	17.10.30	歴史館いずみさのミュージアムトーク 「民家の見方・しらべ方」(御船達雄)
18.03.25	考古学研究会 「岩橋千塚・大日山35号墳の発掘調査」 (丹野 拓)	17.12.04	金剛峯寺大門見学会(鳴海祥博)
18.03.31	「岩橋高柳遺跡(湯浅氏屋敷・居館跡)の発掘調査」 「和歌山平野における荘園遺跡の復原研究-中 世日宮宮の研究-」海津一朗編(丹野 拓)	17.12.17	「橋本まち並みスケッチ展」に伴う歴史的建 造物の解説(御船達雄)
		18.01.21	日根荘フォーラム連続講座第2回「建築・瓦」 (鳴海祥博)
		18.01.31	和歌山県文化財保護協会「和歌浦天満宮見学会」 (鳴海祥博)
		18.02.19	和歌山地方史研究会大会 「観光・歴史資源としての根来の可能性」 (鳴海祥博・鈴木徳子)
		18.03.18	有田川町歴史講座「和歌山県に特徴的な丸棧 瓦について」(御船達雄)

IV 刊行物

文化財建造物修理工事報告書

「県指定文化財荒田神社本殿修理工事報告書」荒田神社

発掘調査報告書

「野上中南遺跡 - 半島振興道路奥佐々阪井線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 -」

「高田土居城跡・徳蔵地区遺跡・大塚遺跡 - 県道上富田南部線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 -」

「楠見遺跡 - 都市計画道路西脇山口線改良工事に伴う発掘調査報告書 -」

「徳蔵地区遺跡 - 古川高速道路関連河川改修に伴う発掘調査報告書 -」

埋蔵文化財と文化財建造物のミニ情報誌 「文化財センター通信 風車」

第13号	17.08.09	「県指定史跡 水軒堤防発掘調査特集！」
第14号	17.09.15	特集「県指定史跡 水軒堤防を考える」
第15号	17.10.04	連続特集「重要文化財 福勝寺」その1
第16号	17.11.18	連続特集「重要文化財 福勝寺」その2
第17号	17.11.28	太田・黒田遺跡（県1次調査）発掘調査中間概要報告
第18号	17.12.26	連続特集「重要文化財 福勝寺」その3
第19号	18.01.25	旧吉備中学校校庭遺跡発掘調査の概要
第20号	18.03.03	太田・黒田遺跡（県1次調査）発掘調査概要報告
第21号	18.03.10	連続特集「重要文化財 福勝寺」その4

V 普及事業

速報展

「紀州の歩み」 文化財センター 第15回速報展	17.07.02 ～08.20	第7回巡回展 和歌山県立紀伊風土記の丘 共催	於紀伊風土記の丘
関連講座	17.07.16	渋谷高秀「徳蔵地区遺跡の発掘調査でわかったこと」 寺本就「修理でわかった中筋家の歴史」	

公式ホームページ

開設	17.09.30	アドレス： http://www.wabunse.or.jp/
----	----------	---

埋蔵文化財課

県指定史跡 水軒堤防

現地見学会	17.05.25	県立和歌山工業高等学校土木科見学会
現地説明会	17.05.28	参加者約150名 〈現地説明会資料作成〉
シンポジウム	17.07.09	「県指定史跡 水軒堤防を考える-築造年代と今日的意義-」 参加者約70名

太田・黒田遺跡発掘調査

現地説明会	17.10.08	第1回 参加者67名 〈現地説明会資料作成〉
現地説明会	17.12.10	第2回 参加者86名 〈現地説明会資料作成〉
現地見学会	17.09.27	県立向陽高等学校文化科学科見学会
現地見学会	17.12.10	和歌山大学教育学部大学院生見学会
「太田・黒田遺跡たいむり〜♪」①〜⑨ 発行		

旧吉備中学校校庭遺跡

現地説明会	17.12.03	参加者42名 〈現地説明会資料作成〉
現地見学会	17.11.09	旧吉備町立藤並小学校6年生 総合学習
現地見学会	17.11.14	同町立田殿小学校6年生 総合学習
現地見学会	17.11.15	同町立御霊小学校6年生 総合学習
現地見学会	17.11.25	県立有田中央高等学校日本史B専攻生見学会
現地見学会	17.12.06	和歌山県高等学校社会科研究会Cブロック（有田郡）見学会

特別史跡 岩橋千塚古墳群発掘調査

現地説明会	17.12.17	参加者392名〈現地説明会資料作成〉
現地見学会	17.12.03	和歌山大学教育学部大学院生見学会
現地見学会	18.02.04	関西ツーリスト見学

海南整理事務所

吉備町 子供探検隊	17.06.24	旧吉備町教育委員会主催 出土遺物の整理作業体験
--------------	----------	-------------------------

文化財建造物課

重要文化財旧中筋家住宅

現地見学会	17.04.23	J A 和佐支所
現地見学会	17.05.14	和歌山市立博物館
現地見学会	17.05.22	地元自治会
現地見学会	17.06.08	和歌山大学
現地見学会	17.07.09	金沢職人大学
現地見学会	17.08.08	長岡造形大学
現地見学会	17.09.26	京都大学
現地見学会	17.10.15	和歌山市立博物館
現地見学会	17.11.18	和歌山県立博物館友の会
現地見学会	17.12.04	地元住民対象
現地見学会	17.12.07	岩出町郷土史研究会
現地見学会	18.02.08	和歌山県立和歌山東高等学校－総合学習
現地見学会	18.02.24	和歌山県立和歌山高等技術専門校
現地見学会	18.03.20	京都大学
そのほか	17.12.04	テレビ和歌山「はばたく紀の国 蘇る文化財－文化財保存修理の現場から」

重要文化財福勝寺本堂ほか

現地見学会	17.04.02	橋本地区住民対象
現地見学会	17.08.28	海南市主催見学会に協力
現地見学会	17.10.23	海南市主催「熊野古道わくわくハイク」に協力
そのほか	17.12.04	テレビ和歌山「はばたく紀の国 蘇る文化財－文化財保存修理の現場から」
そのほか	18.02.01-03	福勝寺修理現場で「建物の構成材調査」受入れ（東京大学）

(財)和歌山県文化財センター
公式ホームページ
<http://www.wabunse.or.jp/>

財団法人
和歌山県文化財センター

更新日 平成18年12月27日
 問い合わせ E-mail: maipow-1@wabunse.or.jp
 〒640-8404 和歌山市湊571-1
 tel (073)433-3843 / FAX(073)426-4595

文化財センターの紹介
 重要文化財課の業務
 建造物課の業務
 刊行報告書等データ
 リンク
 お知らせ

更新情報

QR CODE

Ⅵ 和歌山県文化財センター組織表

理事長 1名	理事 6名	専務理事 —— 事務局長 —— 管理課 埋蔵文化財課 文化財建造物課
副理事長 2名	評議員 14名	
専務理事 1名	監事 2名	

Ⅶ 職員名簿

	専務理事 岩橋 駿				
	事務局長 熊崎 訓自				
管理課	課長 西本 悦子	埋蔵文化財課	課長 洪谷 高秀		
	副主査 松尾 克人		主任 井石 好裕		
	主査 出口 由香子		主任 村田 弘		
	嘱託事務員 松田 正昭 (9月30日退職)		主任 佐伯 和也		
	嘱託事務員 菅原 正明 (11月1日採用)		副主査 佐々木 宏治		
			副主査 仲原 知之		
			技師 丹野 拓		
			非常勤専門調査員 川崎 雅史		
			非常勤専門調査員 横矢 晋二郎		
			主任 土井 孝之 (大阪府文化財センターへ派遣)		
文化財建造物課	課長 鳴海 祥博				
	副主査 寺本 就一				
	副主査 多井 忠嗣				
	副主査 鈴木 徳子				
	非常勤専門調査員 御船 達雄				
	稲田 朋実				

(財) 和歌山県文化財センター年報

2005 (平成17) 年度

2006年5月

編集・発行 財団法人 和歌山県文化財センター

(担当 御船達雄/日置 智)

事務局 : 〒640-8404 和歌山市湊571-1

TEL (073)-433-3843/FAX (073)-425-4595

公式ホームページ URL : <http://www.wabunse.or.jp>

印刷 西岡総合印刷株式会社